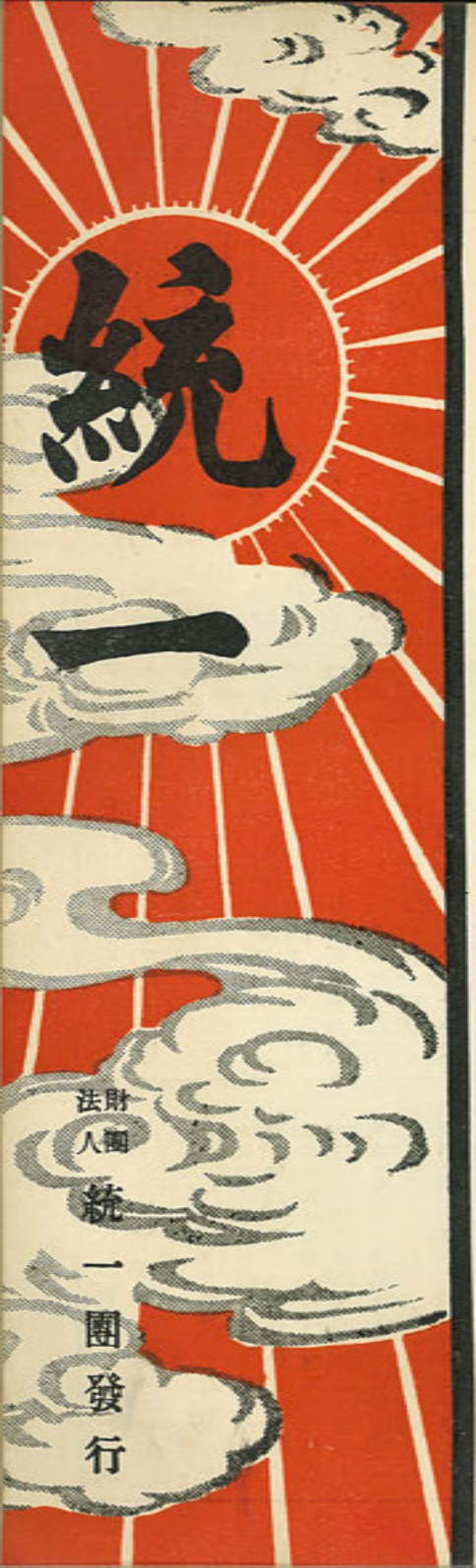


目次

聖訓摘要……日生上人
日蓮教學講座（第十回）……河合陟明
東郷元帥……上田辰卯
法華經講話（第七講）……小林一郎
記事
西の旅……礒部滿事
○團報と教信　○寄附團費誌料領收

第三十九年七月號

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄改版　特價送料共　金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領　仝　金貳圓拾錢
一法華經要義　賜天覽　仝　金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓　仝　金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要　仝　金貳圓九拾錢
一佛教の本質と其價値　仝　金貳拾五錢
一法華經要品　仝　金五拾錢

礒部滿事謹輯
一本多日生上人　特價送料共　金壹圓七拾錢
一勤行作法　仝　金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人 統一團出版部
振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌
定價一冊　金拾錢
送料共　一ヶ年前金　金五厘
金壹圓貳拾錢

申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七
「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和九年五月廿四日印刷納本
昭和九年六月一日發行
（第四百七十一號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人　礒部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢献セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ウテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ願望スル所ナリ

本團略則

◎**目的**　本團ハ日蓮教學ノ心髓ニ謀明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ昂揚ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想　文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎**維持員**　本團ノ業ヲ贊賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎**賛助員**　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

法華經二十重勝諸教義（承前）

日生上人

第三には『隨喜は第五十の人を歎ず』であつて、今申した壽量品の顯本に對してひと念ひ『有難い』と思うたその精神、それをその儘では餘り上等過ぎるから、家に歸つて女房に話をする、『今日統一閣に行つた所が、法華經壽量品に釋尊の絶對價値が說かれてある、あすこが本當だと思つた、あの議論を聽いたら弘法大師などは木片微塵ぢや、どうも有難いッ』と言つて話す、それを聽いて女房が感心して『成る程さういふ譯でありますか、弘法樣も偉からうけれども、お釋迦樣の惡口を言ふとは怪しからん坊主ですネ』といふので、その女房が感心して隣のお婆さんの所に行つて、『お婆さん〳〵お大師詣りは廢めなさい、弘法大師ナンといふのは斯ういふ人です』と言つて段々話をする。それが傳はり傳はつて行く度に幾分か宛その感心する度合が稀薄になつて行く、それが五十人まで展轉して行つた時分にはスツカリ稀薄になつて、モウ隣のお婆さんに話をする力も無くなる、聽いた儘で『さうですかいナー』

といふ事になつてしまつた。その第五十人目の稀薄になつた人間を捉へて來て、その隨喜の心が段々展轉して第五十人目に至つて最も薄くなつた者のその有つて居る所の功德と、一方に八十年の間あらゆる社會事業をやつて、貧乏人に金を與れたり、いろ〳〵な世の中の功德善根を積んだりした功德と、この本佛の有難いことを聽いて五十人目に至つて、ぼんやり『成る程』と思うた功德とどつちがえらいかと比べて見る、さうして見るとこの第五十人目の功德の方が遙かに秀でて居るものちやといふことを隨喜功德品に於てお說きになつた。それは唯だ左樣にして有難い事と思はさうといふのではないのであつて、事實さういふ功德が其處にあるのである。例へば家庭に於ける一切の功德は、いろ〳〵店を綺麗にしたり、庭に樹を植ゑたり、水を撒いたり、そんな事をナンボやつても、親不孝の精神が一つあつて、『この親父……』と言つて拳骨を振上げるといふやうな事になつたならば、ナンボ商賣を勉强して店を綺麗にして疊換をしたといふ功德も、皆フイになつてしまふ。日本に於ては國民としていろ〳〵の事をどんなに盡しても、社會主義ナンといふものに感染れて、皇室の尊嚴を一點でも疑ふやうな氣分がヒヨツと起つたならば駄目である。であるから佛敎を中心にして考へると、全宇宙にまします所の本佛の有難さを感じなければならぬ、これが大きな問題である、眞實に研究して見るとそこに尊さがある、それを能く說いたのが『隨喜は第五十の人を歎ず』といふことである。これ程の一と念ひ『有難い』と思うても非常な功德のあるものを、他の宗旨が寄つて集つてケチをつけて、『法華經は難行道だ、親父の穿いた大きな靴が孫の足に穿かれますか』といふやうな詰らぬことを言つて居る、或は『それは小判は結構か知らんけれども、私共は猫みたやうな者だから、猫に小判は駄目でごわす』……說敎者などが變な聲を出して、この法華經の尊さを毀けるといふことは怪しからん事である。この隨喜は第五十人を歎ずといふ事が法華經の一つの長所である。

第四には『聞益は一生補處に至る』といふ事であるが、これは分別功德品にあるのであつて、法華經壽量品の說を聽いて『成る程有難いッ』と思ふそこに於て、『一生補處』と言つて佛樣の繼嗣になる、一生補處といふのは丁度國で言へば皇太子殿下の御位といふやうなものであつて、壽量品を聽いて『有難いナ』と思ふ者は佛樣の候補者になつて、あとから押しかけて行くやうな位地にある者である。それは分別功德品に『一生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』と、ずつとその功德が廣大無邊に說いてある。

第五は『釋迦は三逆の調達を指して本師と爲す』と言つて、惡人の成佛を現はすが爲めに、提婆品に於ては、他のお經で非常に攻擊せられて居つた提婆達多が、段々その本地を開顯して遂に天王如來といふ佛樣に成ることを許されて居る。この惡人の成佛といふ事も大事な事であつて、自分が惡人でないにしても、自分の關係して居る者に惡人といふものが出來て來る、マア親が惡人といふことはないにしても、自分の產んだ子が惡人であるとか、兄弟が惡人であるとか、兎に角世の中にはさういふ嫌な關係に

立つことがある。それ等の惡人といふ者を救はなければならぬ、さうしてどんな惡い者でも救ひ取るだけの力が宗教には無ければならぬから、提婆達多を擧げて法華經がその成佛を許したといふことは、如何にも有難いお經であります。

第六は『文殊は八歳の龍女を以つて所化と爲す』といふので、これも提婆品にある女人の成佛といふ事である。今更いふ迄もなく他のお經には女人を虐げたやうな所が大分ある、さういふ所ばかりではないが、日本の坊さんはどういふ譯か知らぬが今日までさういふ風にばかり言うて居つた、これはやはり無學の致す所であると思ふ。本當はお釈迦樣くらゐ女の味方をした人はない、非常に女の壓迫せられて居るのを歎いて、いろ〳〵女人の味方をして說明なさつて居る、けれども他のお經ではハッキリしなかつたものであるから、女は業が深いとか、女は罪の塊りであるから女を一眼見たら地獄に行くとかいふことになつて居つた。さうなつたら東京などには居られない、一と眼や二た眼どころではない、ちよつと外を歩いても女が澤山居るのだから、皆地獄に行かなければならぬ譯である。『女はをなごと言つてごの字がつくだらう、男の方はをとこといふぢやないか、ごといふのは業で、女は業が深いからだ』…そんな馬鹿なことを坊さんが說敎して居つた、そんなものではない。女にも無論罪のある所もあるけれども、男にも罪の深い所がある、併し監獄に行つて見たら判かる、どつちが餘計入つて居るかと言へば男の方が餘計入つて居る、だから女の方が罪が深いナンといふのは愚な事である、それは女は消極的に性の惡いやうな所があるけれども、男は積極的に罪惡を犯すものである、女が猫であれば男は虎か、獅みたやうなものである。だからそんな事は詰らぬ話で、お釈迦樣はその位のことは十分御承知である。或る男が『どうも家の女房は不都合な者で困りますから、女の缺點について一つお話を伺ひたい』と言つて來た、お釈迦樣は『さうか、宜しい』といふので、女の缺點を說くかと思うたら『お前は男ぢやないか、女の缺點より男の缺點を先づ話してやらう』といふので、諄々と男の缺點を話された、そこ等が佛敎の本當の所である。女の人が來れば女の缺點も話されるけれども、亭主が來て女房の惡口を聽きたいといふ、それに一緒になつてお釈迦樣がケシかけるやうなことは決して有るべき事ではない。法華經に至つては能くそれが表に現はれたから、提婆品の龍女の成佛の所は、男が顏色の無い程に女の尊さが示されて居る、智慧第一の舍利弗、多寶如來のお伴をして來た智積菩薩が、兩方から『女は穢れた身であつて、法の器にあらず、女は成佛すること難し』といふやうな工合で、いろ〳〵攻め寄せたけれども、女人は平然として『私は議論はしません、私は今や既に成佛し終つて居る所の者である、今直ちに佛樣に成つて見せる、事實が之れを證據立てる、瞬して居つては見損ふといかんから、確り見てお居でなさい』といふので、忽ち佛に成つてしまつた、『サアどうだ』と言つた時に『默然信受』と言つて、皆頭を下げて恐れ入つてしまつた、實に法華經の女人成佛ぐらゐ愉快な所はない、單に文學として考へてもこの一節を讀んだならば、本當の女の人ならば手を拍かずには居れない所である。羅什三藏が長安の都

に於て始めて法華經の飜譯をせられた時分に、『愈々飜譯が出來ました』と言つて天子樣の所に之れを持つて行つた、所が御殿の女中方がこの提婆品を見て大變感心して、そこだけ採つて棚を拵へてその上に載せて置いたといふ、それが爲めに暫くは提婆品が法華經の中から脱けて居つて世に出なかつたといふ位のものである。この婦人の問題は今は唯だ解放とか自由とか言つて居るけれども、どうしても宗教の本當の立場から婦人の地位を恢復して行かなければ『この地位を認めんければ石を打つけるぞ』といふやうなことで婦人の地位を恢復しやうとするのは愚な事である。堂々たる宗教の大きな教化の中から婦人の德が段々に開けて行く、この法華經の思想が實に善い事であります。

第七には『凡そ一句を聞くも咸く授記を與ふ』といふので、これは法師品に說いてありますが、法華經の唯だ一句といふ簡單な教を聞いて隨喜の心を起して『有難い』と思へば、佛樣の授記と言つてお許しを受けて、間違ひなく成佛が定まつて來るといふことが說いてある。是等に依つて見ても法華經は決して難行ではないといふ事は明かであります。

第八には『經の名を守護するに功量るべからず』といふので、これは鬼子母神やその他の諸天善神が法華經の名前を唱へる者を守護する、即ち南無妙法蓮華經と唱へる者を守るといふ誓ひを立てた、それをお釋迦樣が褒められて、諸天善神が法華の行者を守護するといふのは善い事であるから、大いに勉勵してやれと言はれた。これはどういふ譯で妙樂大師が引いて居るかといふと、お經の名前だけを持つといふのは極く簡單なことである、內容には少しも入つて居ない、唯だ表題の妙法蓮華經に『南無』をつけて『南無妙法蓮華經』といふ、洵に簡單なものである、その簡單なものでも、法華經は尊いお經であるから、その題目を唱へる者さへも諸天善神が之れを守護して下されるといふ事を說かれたのである。未だ日蓮聖人などが出られない時分に、既に妙樂大師が之れを二十箇條の一つに擧げて居るのであります。

それから第九は『品を聞いて受持すれば永く女質を辭す』、これは藥王品にある事でありますが、法華經の藥王品を持つたならば、女は何時までも女の身ではない、必ずや成佛するといふので、女質を辭するといふことが說いてある。阿彌陀樣ばかりが女を助ける譯ではない、法華經に依りさへしたならば女人でも皆悉く助かるといふことが藥王品に說かれて居る。

第十は『若し聞いて讀誦すれば不老不死』これも同じく藥王品にある事で、法華經は閻浮提の人の病の良藥であるが故に、若し人病あらんに是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならんと說かれて居る。これは心の病が本であるけれども、心から又身の病に關係をするから、そこで佛教で使ふ『病』といふ字は、大體心の事であるけれども『病即消滅』と言へば兩方に及んで、身の方の病にも法華經は不思議なる御利益を現はすものである、それは日蓮聖人の一代の經歷に就て見ても、母を祈られて蘇られたこともあるし、伊東朝高を祈られて病氣の平癒した事もある。法華經が現世に於て功德

の崇かなことは明白で、あまり効き過ぎるものだからいろ〳〵の祈禱者みたやうな者が出て來て誤魔化しの事をやるのであつて、今はやり過ぎて却つていけなくなつて居るのである。

それから第十一に『五種の法師は現に相似を獲』といふのは法師功德品であつて、法華經を修行するが爲めに六根莊嚴の功德といふものを獲る。近頃は餘りないが、性空上人の法華傳などに出て居る所を見れば、今の所謂千里眼のやうな、人間の働きを超越したる作用が現はれて來る。これも古來數多いことで、日蓮聖人の龍の口の法難とか、或は俎岩の法難などの如きも、その不思議なる感應を受けた所といふものは、やはり尋常の事ではない。日蓮聖人は別段それを誇りとは爲さつて居らないけれども、考へて見れば非常なえらい德をそこに現はしてお居でになる譯である。

第十二に『四安樂行は夢に銅輪に入る』といふのは、安樂行品の終に出て居る事で、銅輪といふのは王樣に成るといふ事である、これは轉輪聖王の中に銅輪、金輪などと申していろ〳〵な王樣の位地があるが、その一つに成るといふ事である、即ち非常な幸福な夢を見るといふ事である。法華經を信心して居れば、夢にも鬼に捕まへられたり、大蛇に呑まれたりするやうな夢は見なくなる、同じ夢でもさういふ夢を見ては詰らない、火事に出會つてマゴ〳〵して泥溝に落ちたといふやうな夢を見て、汗をビッショリかいて眼が覺めるやうではいかん、夢はやはり平常の精神が影響するものであるから、夢に銅輪の位に入るといふことは、詰らぬ事のやうであるけれども、夢の中にでも轉輪聖王になつて、正しき敎を

以つて敎化を布く。即ち日蓮聖人が考へて居るやうに、正法を以つて天下を治めたいと思うて居る所に詰らぬ奴がやつて來る、そこで非常な力を現はして、さうしてさういふ間違つた思想や迷信などを一掃してしまつて、理想的の國家を造つて、敎は正しき敎が行はれ、人の人格は向上し、實に愉快な國家が出來る、其處へ轉輪聖王になつて自分が乘込む、『アヽ愉快だナ』といふやうな夢を見るといふ、洵に有難い事である。孔子が『夢に周公を見ず、噫衰へたるかな』と言つて歎いたといふことがあるが、日蓮主義者は自ら轉輪聖王になつて、夢にでも左樣な理想の天下を經綸するといふ熱誠のある方が宜いのであります。その夢を見る位な人が居らなければ面白くない。之れを一つの特色に數へられたのも妙樂大師の着眼が洵に面白いと私は敬服をして居るのであります。

第十三に『若し惱亂する者は頭七分に破る』といふのは、これは陀羅尼品であつて、法華の行者を惱ます者があつたならば、鬼子母神樣が怒つてその者の頭を七つに打ち破るといふ事がある。これは何の爲めかと言へば、法華行者が大切であるといふことを現はして居るのであつて、それはやはり法華經が大事であるから、法華經を弘める法師は諸天善神が守るといふことになるのである。

第十四に『供養することある者は福十號に過ぎたり』といふのは、法師品にあるので、法華行者を大切にすることは非常に尊いといふ事を說かれた。一劫の永き間佛樣を御供養する功德よりも、末代の法華經の眞の正しき行者を一度供養する者は、その功德これに勝れりと說かれて居る。それは何の爲め

かと言へば、やはり法華經の宣傳といふ事が大事であるが故に、その法華經を弘める法師を斯くまで大切にせられて居る次第である。

第十五は『況んや已今當は一代に絶えたる所なり』といふので、これも法師品の三說超過といふ事で今までに已に說いたお經、今說くお經、それから後に當に說くべきお經の中に於て法華經は第一である一代五十年を通じて一切經の中に法華經最爲第一なりといふことを說かれた。

第十六には『其の敎法を歎するに十喩を以つて稱揚す』といふので、これは藥王品の十喩稱揚と言つて、法華經は光の中に於ては月の如く、水の中に於ては海の如く、山の中に於ては須彌山の如くといふやうに十の尊い事を擧げて法華經に譬へられて居る。他のお經は川のやうなものである、假令大日經が大きいといつた所が信濃川か利根川みたやうなものである、法華經は大海の如くである、どんな川でも皆法華經の中に流れ込む、又川がストライキをやつて、『海の奴えらさうに威張るから』と言ふので、總ての川が水を一滴も海に流し込まぬからと言つても、それが爲めに海が乾いてしまふといふことはない、『それならば溢れさしてやらう』といふので、總ての川が一緒になつてドン〳〵流れ込んで來ても海は別に一寸だもそれが爲に水は殖えはしない。一切經が法華經に敵すると味方するとに依つて、法華經の價値は少しも增減しないといふ事が說いてある、實に面白いものである、入れても宜し、出しても宜し、どつちでも宜い、一切經を入れゝば海が一切の川を入れるやうなもので、又好い工合に入るやうになつて居る、そこが釋尊の敎の廣大なる所以である。

第十七には『地より涌出せるを阿逸多一人をも識らず』で、阿逸多といふのは彌勒菩薩のことであるが、彌勒菩薩が上行等の菩薩が地から出現したのに就て、その中の一人をも識ることが出來なかつたといふのは詰り本化の菩薩の秀でて居ることを現はし、本化の秀でて居ることに依つて自ら本佛の德を現はして來るものである。

第十八には『東方の蓮華を龍尊王未だ相本を知らず』これは妙音品に說かれて居る事であつて、龍尊王といふのは文殊師利菩薩のことである、文殊師利菩薩は中々えらい智慧の文殊といはれる位だけれども東方の妙音菩薩がこの娑婆世界にやつて來る時分に、この妙音といふのは妙な菩薩で音樂入りでやつて來るのである、その妙音が來る前に、いきなり天に音樂が聞えた、文殊が驚いて『このよい音は何だらう』と言つた『お前の智慧を以つてこの位の事は考へて見ろ』『どうも判りませぬ』その文殊の智慧の及ばぬやうな所から妙音菩薩が使に來て、さうしてお釋迦樣の前にピツタリ頭を下げて隨喜讚歎の敬意を表して居る。これ亦何を意味するかといへば、妙音といふ非常なえらい菩薩が東の方から來るのであるが、その時分に『妙音被誡』と言つて、妙音菩薩がその東の方の佛樣から使に來る時分に言はれて居る事がある、妙音菩薩は身の非常に大きな、何とも言へぬ大きなえらい菩薩である、『お前が娑婆世界に行つて見ると、娑婆世界の人間は五尺か六尺で如何にも小さいけれども、左樣な事を以つて娑婆世

界の人間を輕蔑してはならぬ、又お釋迦樣の妻が如何に小さからうとも、それは娑婆世界の者を教化せんが爲めに適當なる姿を取つてお出でになるのである、却つてさういふやうな所に生れて、いろ〳〵人間に適當した御教化を下さることは御苦勞と申さなければならぬのであるから、娑婆世界に行つて失敬な事の一つでも言うたらいかんぞ』といふ事を言ひつかつて、それから堂々たる儀式を以つて妙音菩薩がやつて來る。そこで文殊師利はじめ『えらい方が來たナ』と思うて感心して居ると、今のやうに誡められて居るから、釋尊の前にハツと頭を下げて非常な敬意を表した、これが佛教の說き方である。弘法や法然のやうな工合に無闇にお釋迦樣の頭を殴りに來るやうな者は一人も無い、どんな偉い者があつても佛教に於ては釋尊の前にはピタリッと頭を下げて居る。維摩といふのは剛性な口の達者な親父で、何を言つても人のいふ事を肯かぬ、病氣だといふので見舞に行つても、見舞が出來ない『私はあなたの病氣の見舞に參りました』と言ふと『病氣見舞とは何だ、一體病氣とは何だ、俺の病氣は一切衆生の惱めるが故に吾れ之れを心配して居る、何處に見舞に行くのか』といふやうな譯で中々鼻息が荒い、仕方が無いから『私は歸ります』と言ふと、『歸るとは何だ、目的を達せずして歸ることが出來るか』といふやうな譯で、行く者行く者みんなやられてしまつた。そこで最後に文殊が行つた所が、これは中々えらい人であるし、維摩も中々理窟の達者な親爺だから、どつちが上とも下とも判らぬ、默つて睨み合ひをして居つたといふやうな事で、維摩經といふものに成つて居る。その文殊でも維摩でも、佛樣の處に來ると皆頭を下げて絕對の敬意を表する、これが佛教である。日本の皇室の尊嚴もその通りで、大勳位とか公爵とかいへば世間では大した者である、西園寺さんが奥津の停車場にでも降りたならばそれはえらいもので、驛長から警察署長から皆出迎ひに來てお辭儀をする、その西園寺さんでも、天子樣の前に出ればピタリッと頭を下げる。これが一切經の說き方である、他でどんなに尊い者でも、その尊い者がお釋迦樣の前に來ればハツと頭を下げて居る、この說明式が一切經を通じて居るものである。それを玆に擧げてあるので、智慧第一の文殊が『その相本を知らず』この音樂が聞えるのはどういふ譯かと言つてマゴついた位のえらい妙音菩薩が來ても、ちやんと誡められて居るから釋尊に絕對の敬意を表した、その意味を法華經の特色として妙樂大師が擧げられたのである。

それから第十九の『況んや迹化には三千の墨點を擧ぐ』といふのは、化城喩品に釋迦如來の三千塵點の昔、大通智勝如來の時に十六王子の一人として、その時分から法華經を以つて我等を導き給ひしことが說いてある、それを擧げたものである。

最後に第二十に至つて『本成は五百の塵點に喩へたり』これは壽量品の顯本が五百塵點といふ數を擧げて說明せられてある、これは唯だ舊いといふことばかりではない、數へきれない所の廣大なる數を擧げてその無限が說かれて居るのである。これが唯だ舊いといふ言葉とは違ふので、斯ういふ數を說くことに依つて思想が伸るといふことが非常に大事ナンである、同じ事であつても上なら上の方を指して、

『天は涯りない』と言つてしまつてはちよつと判らない。小さい子供などは五間か十間位の所で止つてしまふ、それ以上は思想が伸びない。諸君が考へてもさうでせう、例へば飛行機が空高く上つて行く、何處まで行くか、モウ見えなくなつた、見えないが未だ昇つて行く、ずつと昇つて〳〵さうして限りが無い……斯う言ふ、さうすると如何にも遠いやうに思はれる。そんな事は言はなくとも、始めから天は無限だといへば宜いちやないかといふけれども、それでは思想が伸びない、思想の發達して居らぬ者は數の考へが伸びない。極く判り易くいへば子供に數を算へさせると、一ッ二ッ三ッ五ッ十七ッ……といふやうな工合に直ぐ迷つてしまふ、始めの一ッ二ッ三ッ位は間違ひなく出來るが、五ッ七ッと直ぐ間違へる、吾々は百、千、萬といけるけれども、それでもずつと上の方になつて來ると、やつぱり出來なくなつてしまふ。野蠻人ほどこの數の觀念は進んで居ない、以前北海道のアイヌ人の漁つた鮭を日本に持つて來るのに、こつちから何か品物を持つて行つて、大阪の商人が行つて取換へて來る、所が向ふは數を算へることがうまくいかぬ、大阪の商人は狡猾いものであるから、澤山並べて置いて一ッ二ッ三ッ七ッ四ッ九ッ二ッといふやうな風に誤魔化して、いくら數へても澤山にならぬ、そんな事をして取つて來居つた。さういふやうな譯でこの思想の伸るといふことが大事である、五百の微塵を擧げるといふことは、數に寄せて非數を說いたといふ事に依つて非常に尊い事ナンである。弘法大師はそれを知らなかつた、彼もやはり無學な所がある、數に寄せて非數を說くといふ事が、今私の言うた意味である、これは諸君が自分で考へて見たら判かる。例へば方角にしても、何處まで伸びて行くか考へて見給へ、此處から東の方に行つて端が無いといふ事を考へて見給へ、大抵の人は市川ぐらゐで考へが切れてしまふだらう、それが千葉まで汽車に乘つて行つたことのある者は、市川、船橋、千葉といふやうに伸びて行くけれどもあの房州の端から向ふに海を渡つて行つたことの無い者は、小湊まで行つて切れてしまふ、それが船に乘つた海軍の人か何かならば、ずつと海の上に乘り出して、それから〳〵と考へて行く、さういふやうなものである。所がこの壽量品に於て說かれた五百塵點といふのは實にえらい數量であつて、聞いたとけでも思ひが盡きてしまふ位である、佛が彌勒菩薩に對して『今擧げたこの數は汝等どう思ふか』と言はれた時に、『算數の知る所にあらず、亦心力の及ぶ所にあらず、我等不退の位に住すれども此の事に於ては亦達せざる所なり』と言つたやうに、そこで觀念が切れてしまふ。その永い〳〵前から俺は佛であつたのだといふ、數に寄せて非數を說く、無限の本佛といふことが非常に壽量品の尊い所である。それを弘法大師は、『そんな永いやうな事を言つたつて、兎に角始めがあるから駄目ぢや』といふやうな事を言つて、法華經を戲論と嘲つたが、これは今申すやうな哲學的の研究から行つても弘法大師がその意味を知らなかつたものである。

以上二十箇條の事は、何れも法華經の中に出て居る事であるが、一切經には斯ういふ尊い意味合ひが能く判らぬと妙樂大師が言はれたのであります。この中に於て就中始めに擧げた『二乘の成佛』と、そ

れから『如來の顯本』といふ二つが一番大事な事になる、若し一つで言つたら『如來の顯本』が一番大事になつて來るのである。三つにすればそれに『隨喜の信仰』といふものを加へる譯である。二十あつてもその重い輕いを比べて見ると宜い、法華宗の者は斯ういふやうな事をモウ少し詳細に考へて置かなければならぬ、この二十の名前が判らぬやうではいかんから、名前などは覺えてしまつて、『さてどれを上に置くか、この中では顯本といふ事が一番重い』といふやうに、少しは考へて見なければいかん、唯だ墓口の錢でも數へるやうに『これは五錢』『これは十錢』…それでは駄目である。この結構な教に就て法華經を翫味して見て、さうして『この二十の中で私は女だから女人の成佛が一番有難いやうだけれども、併しやはり壽量品の顯本の方が大事だらう、女が死んだ時に提婆品さへ讀めば宜いといふのは、ガラ、ク、タ坊主だ』といふやうに、ちやんと判る譯である。人間は少しは物が判らんければ面白くない。折角人間に生れて何も判らぬで宜いならば、寧ろ蛙か土鼠に生れた方が宜いといふものぢや。（此鈔終）

日蓮教學講座（第十回）

文學士　河合陟明

★　常への解脫は名くべきに非ず、妙色湛然として住す。聲聞　緣覺　菩薩の境　★

★　界にあらず。諸佛世尊の解脫に到る者皆有色なり。實には有我にして無我に　★

★　非ず。一切衆生も悉く佛性有りて、無量の相好莊嚴炤明なり、かの性　★

★　を以てのゆゑに一切衆生は般涅槃を得、もし諸佛に遇はゞ、聲聞　緣覺もす　★

★　なはち眞我を知らん。是の如く彼の衆生界は無邊明淨なり。（大法鼓經）　★

第一章　佛陀の人格的諸相

第二節　佛陀の體相（二）

佛陀の人格實在に於ける白眉の教義は、その體相を論じて相對實在を明かにするところに在るのであつて、さきに日蓮聖人の信仰體驗に於て、その本佛信仰の生々しき人格的實感を把握したのであるが、こゝには聖人の教學的示唆をいさゝか眺めて、ゆいては先賢のこの點に關する思想をも少しく考へてみやう。

まづ日蓮聖人の御妙判を尋ぬるに、

聖人が統一的の一大本佛を光顯せられたる適文は開目鈔、日眼女釋迦鈔等に於てその幽旨を明されてゐる。

しかりといへどもいまだ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず、二乘作佛もさだまらず水中の月を見るがごとし、根なし艸の波の上に浮べるに似たり。本門にいたつて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打ちやぶつて本門の十界の因果をときあらはす。此れ即ち本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に備りて、眞の十界互具百界千如一念三千なるべし。

本門十四品も涌出壽量の二品を除いては皆始成を存せり。雙林最後の大般涅槃經四十卷、其外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく法身の無始無終は說けども應身報身の顯本はとかれず。

此の過去常顯るゝ時諸佛皆釋尊の分身なり。爾前迹門の時は諸佛釋尊に肩を竝べて各修各行の佛かるがゆゑに諸佛を本尊とする者釋迦等を下す。今華嚴の台上、方等、般若、大日經等の諸佛皆釋迦の眷屬なり。今爾前迹門にして十方を淨土と號して此の土を穢土と說かれしを打ちかへして、此の土は本土なり十方淨土は垂迹の穢土となる。佛久遠の佛なれば迹化他方の大菩薩も教主釋尊の御弟子なり。一切經の中に此の壽量品ましまさずば天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんがごとくしてあるべきを……

而るを諸宗は本尊にまどへり。一代教の中未だ曾て遠を顯さず、父母の壽は知らずんばある可からず、若し父の壽の遠きを知らずんばまた父統の邦に迷ひなん、徒に才能ありと謂ふとも全く人の子に非ず。壽量品の佛を知らざる者は父統の邦に迷へる才能ある畜生と書けるなり。子の父をしらざるが如し。

すなはち開目鈔は、まづ佛界の實在に關する根本的因果すなはち本因本果の法門に約して「事の一念(主觀)即三千(客觀—宇宙)」の法體を成立し、以て法界的の一大圓佛を說き、これを報應顯本(佛陀がその大果「報」に安住して、微妙の相好あり、大覺あり、慈悲ありて、衆生に「應」じて救ひを垂れらるゝ有樣が、久遠無始の根「本」より法界—宇宙に「顯」れてゐること)におし進めて宇宙の中心を點示し、すなはち法界の本尊を確立し、而て本迹觀(本身と、その活動して現實に迹を垂れ身を現すこと)に於て無始盡十方周遍の示現利益をこの報應顯本に歸し、微妙尊特の人格的佛陀の實在を指して父子親愛の關係を示し、「壽量品を知らざる諸宗の者は畜生に同じ、不知恩の者なり」と道破せられた。以て知るべし開目鈔の統一的本佛觀は、有相尊形の人格的佛陀の實在に存することを。また日眼女造立釋迦佛供養事を見よ。

三界の主 教主釋尊一體三寸の木像これを造立し奉る。法華經壽量品に云く、或は己身を說き或は佗身を說く等云々、東方の菩德佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利、舍利弗等、大梵天王、第六天の魔王、釋提桓因王、日天、月天、明星天、北斗七星、二十八宿、五星、七星、八萬四千の無量の諸星、阿修羅王、天神、地神王、山神、海神、宅神、里神、一切世間の國主とある人、何れか教主釋尊ならざるや。天照太神八幡大菩薩もその本地は教主釋尊なり。例せば釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮べる影なり。釋尊一體を造立する人は、十方世界の諸佛を作り奉る人なり、譬へば頭を振れば髮も搖るぐ、心働けば身動く、大風吹けば草木しづかならず、大地動けば大海さは

がし、教主釋尊を動かし奉ればゆるがぬ草木や有るべき、さはがぬ水や有るべき。

即ち壽量品の「或は己身を說き他身を說き、或は己身を示し他身を示し、或は己事を示し他事を示す」の文を引き、三世十方の諸佛菩薩及び世天國主の恩惠に至るまで、みな本佛の分身作用による普現迹益なることを示し、釋尊は天の一月、諸佛菩薩は萬水に浮べる影なりと決し、こゝにもまた本迹觀を以て、絕對身を普現色身的に認めて、その中心を報應の人格的本佛に歸せられてある。而てこれを他言にて語るならば、有相相對の尊形を中心として、絕對には無邊の垂形を說くものであつて、決してかの萬有神觀に於ける森羅三千の當相を指してこれ佛なりなどゝいふのではない。上述せる兩鈔の祖判に於ても、その本佛觀を解釋するに當つて、もし十界の全體を束ねて一佛の眞容となし、この一面のみを認めて本佛の眞相を得たりと思つたならば、我宗安心上の歸趣は到底確立することができない、殆ど宇宙神教と簡ぶなきに至るであらう。しかもいはゆる宗學者の多數はこの見解を抱持して得たりとなすも若しこの見解にのみ安んぜば、我宗の佛陀觀は到底純正なる信行の歸趣を把住せしむることができないであらう。學者思を潛めて洞察せよ。

日蓮聖人の本佛觀は、その覺や慈悲や濟度力用などに關して、十界三千の全體に亘る法界遍滿の佛陀を論ずるも、その體用の中心を黙示するときは、人格的相好實在の佛陀を明して、法界の全體に非ず、十界中の一界、一界中の一己身を指して、以てこの人格的中心に無限の信仰を捧ぐべきことを敎へられてをる。

この本佛が救濟の因緣に由つては、時に森羅萬象に應現し、時に或示己身、或示他身して十界の形を現し、或は草木瓦礫乃至三千大千國土往くとして應現せざるなくして、かの良宵の明月幽邃の山川等いやしくも人々に崇高の感を起さしめ、延いて菩提心を起さしめるほどのものは、否時には醜穢の相惡逆の形を現じてすらも、我等をして道念を起さしめるほどのことあらば、たとひ有情たりとも非情たりとも皆これ本佛應現の妙用ならざるはないが、しかもそれは、もと人格的根本中心ありて、妙相あり慈悲あり智慧あり神力ある有意志的大人格者が、吾等衆生を濟度するの必要上より來る感應の妙化と知るべきである。即ち本佛三輪の妙化とは正に是である。大慈悲の「意輪」より發する「身」「口」の二輪、形聲の兩益である。ゆゑに「一心に佛を見たてまつらんと欲す」とは、山川草木等の現象を崇拜するのではなくして、本佛の柔輭の温顏を拜し、御稜威の尊形を拜し奉ることを謂ふのである。この本佛を知らずんば不知恩の者なりと道破せられてゐる、不知恩とは人格ある佛陀に對してのみ正當に言ひ得る語である。もし森羅萬象の三千法界を本佛と指すならば、これを知らざる者は智惠なき者すなはち愚痴の者とこそ云へ、何ぞ不知恩の者と云はんや。「每に自ら是の念を作す」との悲願暫くも息まず、柔輭の御姿を以て造次顚沛ひとへに我等を救濟せんとしたまへるところの本佛を忘れて、流轉限りなく闇きより闇きに入る者は豈に不知恩の者に非ずして何ぞ。聖人が人格的實在の佛陀を說明せられたる文は、遺文中至る所に有る。しば〳〵引用するところであるが、或は「臭き頭を法華經に捧げて金色の如來と成る」と說かれ、或はまた身延山御書には、佛が忉利天へ昇らせたまうた時、五天竺の上下萬人悲歎せし樣を、「昔佛は摩耶夫人（母上）の恩を報じ給はんが爲に、俄かに人にも知らせ給はずして忉利天へ四月十五日に昇らせ給ひておはしけるに、五天竺の國王大臣を始めとして、あやしの賤の男賤の女までも佛を失ひ奉つて泣き悲みける歎き限り無く、誠に子を失ひ親にをくれたるが如し、いとをしき

妻を戀ひ男を戀ふる思の暗すら忍び難し、何に況んや大覺世尊の三十二相八十種好紫磨金色の粧ひ嚴しくして、迦陵頻の御音を以て一切衆生を皆佛に成し給はんと御經を說かせ給ふ慈悲深重におはします佛の御餘波惜み進らする歎き思ひ遣るに、上陽人が上陽宮に閉籠められて歎きし歎きにも勝れ、堯王の娘娘皇女英の二人舜王に別れ奉つて歎きし歎きにも勝れ、蘇武が胡國に流されて十九年雪中に住みけん思にも勝れり」

と記されたのは、法華經にいはゆる「咸く皆戀慕を懷きて渴仰の心を生じ、質直にして心柔輭に一心に佛を見たてまつらんと欲して身命を惜まず」の意と見るべきである。即ち親子の情愛、男女の戀愛の內にも深き至誠の顯るゝものがあるゆゑ、かくの如き意義によつて佛陀を慕へる樣を表はされたのである。まことに親子、夫婦、師弟の關係等も、その深き內奧は宗教的の境地に入る、宗教的のものにつらなる。否今一層洞察せば、人生のあらゆるものゝ眞の實相はすべて宗教的であるのである。即ち人生はすべて有限相對なるものゝ中に、絕對無限の至理を形して、奪ふべからず易ふべからざるものを宿してをるのである。されば人生の道義的また情操的內面よりして、しだいに進んでは宗教の世界につながりゆくのである。宗教は人生の眞のふるさとである、靈の家庭である。こゝに主師親三德の恩惠を以て我等を愛撫したまふ人格の佛を見出した時、始めて我々の眞の滿足があるのである。しかるにもしこのやうな本佛のお姿が山川草木の如き宇宙の當體そのままゝを指せるものならんには、何ぞかくの如き溫情が顯はるゝことがあらうか。或はまた「如來衣を以て覆ひ給ふ」との聖訓の如きは、これ決して松柏の如き又雪そのものゝ如き宇宙の現象を指して如來と見たものではないことを證するに足りるであらう。然るを世人が却つて人格的佛陀を卑しと思惟するは、全く別敎（隔歷して圓融せざる不徹底敎）の見地を出でざるものであつて、豈これ憫むべきではないか。もしそれ微妙の人格的尊形を有して作々發々として慈悲活動し給ひゐる活ける佛陀を認めないときは、佛陀といふも名のみであつて、否實際は佛陀といふこともできず、その本體はたゞ法性眞如の非人格的理體あるのみ、かくの如くんば宗敎としての對象は、虛空の如き漠然たる理法に止まるであらう。信仰の本尊は山川草木の如き非意識のものや、乃至は冷かなる理法の如きものゝ上に滿足するものではなきが故に、法華經の本門壽量品及び日蓮敎學は無始以來の佛陀の人格實在を宣揚して宗敎に命脈を與へたるもの、これ特に尊重すべきゆゑんである。

之を要するに人格的の本佛は事（人格）の一念三千の大哲學に於ける十界十如の事體融即の理を根本として眞を盡し、諸法實相、大覺の證悟、智を盡し、道德に於ては功德神力の大慈悲濟度、善を盡し、三十二相八十種好の相好は美を盡せる有相の尊形にして、無始實在の淨法身である。誠に微妙尊特、言語に絕し一見して菩提心を喚起すべき尊形である。發菩提心にも種々ある中に、佛陀の相好によりて發心する、いはゆる「如來の勝相を緣じて發菩提心に至る」といふは、實に此事である。吾人は須くこの人格の佛陀を以て信仰の本尊と仰がねばならぬ。

譬へば是れ水の全體寒じて大小の冰となるが如し仍て地獄の身と云ひて洞然猛火の中の盛なる焰となるも、乃至佛界の體と云つて色相莊嚴の身となるも只是一心の所作なり。之に依つて、惡を起せば三惡の身を感じ、菩提心を發せば佛菩薩の身を感ずるなり。是を以て一心の業感の冰にとゞられて、十界とは別れたる也（總在一念抄）唯如來のみありて此の衆生の種相體性を知ろしめしたまふ。（妙法蓮華經藥草喩品）

南無妙法蓮華經

（續）

東郷元帥

上田辰卯

東郷元帥御重態ときいて、市川左團次と猿之助の兩丈が見舞に行つたことが新聞に出てゐた。それは無論國民として心痛のあまりでもあつたらうが、曾て兩優が舞臺上で元帥に扮したことのある因緣から特に慕はしかつたためと思はれる。見舞に行つたことには別に不思議はないが、その記事の中に東郷元帥が御一生の間に一度も芝居を見に行かれたことがなかつたといふことが書いてあるのを見て、私は何だか大變不思議に感ぜられた。八十餘年の永い御生涯の中に一度や二度は觀劇の機會もあつたらうに、元帥は昔から劇といふものを好まれず、遂に一度も觀られずして了つたのださうだ。猿之助も、左團次も、共にそれを深く遺憾に思つてゐたといふことも書き添へられてあつた。元帥の芝居嫌らひは眞實かそれともこの新聞記者の誤謬かは解らないが、とにかくあまり芝居じみた眞似は好まれなかつたことは事實のやうだ。私にはこの芝居嫌らひの性格が、即ち東郷元帥のあの大人格の素因となつてゐるやうに思へてこの記事を深く味はつた。軍人と云はず、政治家と云はず、男も、女も、世を擧げて芝居をやつて大衆の喝采を拍することばかり考へてゐる世の中で、たゞ默々としてなすべきことをなし、盡すべきことを盡して、あとは忘れたやうになつてゐることの出來た人は、吾が東郷元帥たゞ一人ではなかつたか。幕末の志士も多くゐた、維新の英雄も少なくなかつた、然しながら終始一貫大義名分に生きてたゞの一度も芝居じみた眞似をしなかつた人は、恐らく元帥より外にはさうなかつた筈だ。派手な御一生であつて、然も微塵もキザな所がなかつたその男性美が、九千萬國民の戀慕を集めた所以なのではあるまいか。

東郷元帥の御病氣重態の發表があつてから、元帥の知友や別懇の間柄の人達の追憶談が、新聞雜誌に澤山載せられた。私も元帥を深く崇拜する一人なので、なるべく見落しなくそれ等を讀んだ。皆殆んど感激の種ならざるはなかつたが、その中で一入興味を引いた話しが、たしか報知新聞であつたかに掲載されてあつた。有名な日本海々戰の眞最中のことだが、露西亞艦隊は、日本の猛烈なる射擊に支離滅裂して火災を起すもの、沈沒するもの、相次ぎ遂に司令長官は驅逐艦に移乘して旗艦は白旗を揭げた。明らかに降伏の意志を表示したのだが、東郷大將は決して砲擊中止を命じなかつた。これを傍に見てゐた秋山參謀は遂に堪まらずに『閣下！降服してゐるものを砲擊するのは如何なものでせうか』と意見を述べた。大將は參謀を一目見た丈で一言も交へず、相變らず砲火を集中した。そして全艦隊一隻も殘らず進退の自由を失つたときに初めて『敵の敗殘艦に向つて水雷大砲の砲口を集中したまゝの姿勢に於て射擊中止』の命令を出された。白旗を揭げたものを砲擊することは或は人道上問題とならぬでもないかも知れない、血もあり涙もある名將とでもいふセンチメンタルな喝采を望むのであつたら、直ちに砲擊を中止して溺死者や瀕死者の救助にでも乘り出すのが一番であつたらう。然し大將は決してそんな芝居じみた眞似をして天下に『情ある名將』の名を賣らうとはされなかつた。自分の任務は敵艦隊を擊滅する

ことである。それ以外に道草を喰ふことは誤りである。よし他日人道問題を起さうとも涙なき鬼提督の名を殘さうともそれは大將の頭には微塵も悔ひとはならなかつたのである。

それでは元帥は本當に血も涙もなかつたらうか、所謂目的のためには手段を選ばなかつた人だらうか決してそんなことがある筈がない。これもある名士の談として新聞に出てゐたことだが、元帥が曾て依仁親王殿下に扈從して英國に行かれたときのことである。これもお伴をして同行された乃木將軍が、英國を出發歸國の途に付かれるといふときに、フト旅順の守將ステッセルのことを思ひ出されて獨り道を別にして露國へ赴かんとされたことがあつたさうである。一年に垂んとする對陣、彼我兩軍が血みどろになつて戰つた當の指揮官であつたから憎さも憎かつたらうが、又堪まらなく懷かしかつたに相違ない、同行者誰一人乃木將軍のこの美舉か義舉かを止めるものはなかつた。然しそのとき元帥一人は贊成されなかつた。理由としてははつきり云はれなかつたやうだが、兎に角それは止せと飽く迄止められたので、遂に乃木、ステッセル兩將軍の會見はなくして了つたさうである。恐らく元帥の頭には敗殘の守將のいとも迷惑な姿がはつきりと浮ばれたに相違ない。元より乃木將軍のことだからそこには斷じて賣名の目論見なぞある筈なく、たゞ一途に敗將を慰めたいといふ純情から出發されたに相違ないが、然し世間はそれで承知するものではない。全世界の耳目を集めた旅順攻守の兩指揮官の再會を如何に誇大に如何に面白可笑しく、喧傳するであらうかは想像に難くない、敗軍の將の心の痛手をそこ迄汲み取られる元帥が何で涙なき提督と云へやうか。元帥には乃木將軍の企てゝさへたゞ一遍の芝居としか映じられなかつたのではあるまいか。

國葬の當日海軍省秘藏のレコード、東郷元帥の講演がラヂオで放送された。何しろ演說は愚か、人に逢はれても餘計な口一ッ出されなかつた元帥のことだから、我々にはせめてレコードによつてゝも音聲をきくより外ないので、この日の放送の時刻を待ち兼ねた位であつた。どんな聲だらうか、重々しいに相違ない、それとも朗らかであらうか、軍人のことだから活潑ではあらうが、お年がお年故落着いて居られるだらうなぞとあらゆる憶測をして居た。然るにいざレコードが廻つて『私は東郷であります』といふ一聲をきいたときに本當にがつかりした。何といふ無表情な聲だらう。進むに連れてそれは丁度小學校の一年生が、先生の前で本を讀むやうに、抑揚もなければ曲折もない、一本調子の先づ演說講演といふ從來の型から云へば無價値なものであつた。これは聽かねばよかつた。きいたために元帥に對する思慕の情が幾分さめて來たやうにさへ思はれた。然しそのあとで直ぐ思ひ出したのは元帥の芝居嫌ひといふことであつた。大きな聲を張りあげるのも芝居だ、或は高く、或は低く、緩急調節も畢竟するに芝居に過ぎない。云はんと欲すること丈を云ひ、聞かんと欲すること丈を聞かせるのに何の技巧が入るものぞ、畢竟價値なきことを價値あらしめんとし、聞きたくもないものに聞かせんとするからこそ身振り口眞似に技巧を用ひ、無い聲を張り上げて絶叫するのではあるまいか。初め元帥の單調なる講演を物足りなく感じた私も、こゝ迄考へて來たときに、今度は正反對に、なる程元帥でなくては出來ない講演だとしみ〴〵感動した。

何百人、何千人の人が、何百度、何千度演說しても世の中はよくならない譯だ。聞きたくもない者に、技巧をもつて、聲をもつて聞かせやうとするからだ。芝居だからだ。茶番だからだ。

宗教の極意といふことにも昔から色々の型がある。念佛を唱へ通して三昧に入つたやうなのもその型の一ッだ。さうかと思ふと世の中をすつかり悟り切つて人間生活に見切りを付け、執着なく、熱情なく丸で氷のやうな行き方もある。私はさういふどれもが芝居氣から出發したもので、本格のものではないやうに思へる。慾で血迷つてゐるのも惡いが、すつかり捨て切つた振りをするのも見好いものではない。それはおシャレする人間も見つともないが、さればとて殊更に身なりを構はない振りをするのも尙キザだと同一だ。それは何れも外界の人が、自分をどうしたら認めてくれるかといふことから出發した芝居氣にすぎない。死に臨んで辭世の歌をよむなんてのも少し變だ。兜の鉢に名香を入れて決死の出陣をしたなんていふのも汚いことではないか、キザと云へば云へぬこともない。明治大帝の御跡慕ひて殉死された乃木將軍も偉いが、又元帥が部下を痛めた點は申譯ないが、やがて死ぬときは自然に死ぬだらうと無表情に構へ込まれたあの一生は仲々大事だ。本格の悟りが元帥の一生を貫いてゐたやうに思へる。

法華經講話（第七講）

文學士　小林一郎

妙法蓮華經序品第一（承前）

この間は序品の中の、釋尊の眉間の白毫の光が東の方の世界を照したといふところでありました。今日はそれに就て彌勒菩薩が疑念を發したといふところであります。

爾の時に彌勒菩薩是の念を作さく、今者世尊神變の相を現じたまふ。何の因緣を以て此の瑞有る。今佛世尊は三昧に入りたまへり。是の不可思議に稀有の事を現ぜるを、當に以て誰にか問ふべき、誰か能く答へん者なると。

（爾時彌勒菩薩、作二是念一。今者世尊、現二神變相一。以二何因緣一、而有二此瑞一。今佛世尊、入二于三昧一。是不可思議、現二稀有事一。當二以問レ誰一。誰能答者）

三昧といふのは、しづかに坐つて身も心も動かない狀態であります。ですから、佛樣は今まで曾てないところの不思議な事を現じたまうたが、此の事を佛樣におたづね申しても御答はないだらう、誰に問うたらよからうか。また誰がよく答へる者であるか斯う彌勒菩薩が考へたのであります。

復た此の念を作さく、是の文殊師利法王の子は已に曾て過去無量の諸佛に親近し供養せり。必ず應に此の稀有の相を見たるべし。我今當に問ふべしと。

（復作二此念一。是文殊師利、法王之子、已曾親二近供養一、過去無量諸佛一。必應レ見二此稀有之相一。我今當レ問）

この大衆の中に文殊師利といふ者が居るから、文殊師利に問うたら多分わかるだらう。彼は『法王の子』といつて、佛樣がいつでも教を與へられた人であつて、また佛樣のお心持がよくわかつた人であるだから文殊師利に問うたならば必ずわかるだらう、と思ひついた。

この『法王の子』といふことばに就ては、チョット考へなければならぬのでありますが、佛敎に於ては、上と下との關係を考へたときに三つの關係があると申します。それは

親——子
主——從
師——弟

親と子の關係、主人と召使の關係、先生と弟子との關係であります。およそ世の中の上と下との關係といふものは、此の三種よりほかない、いろ〳〵細かに言へば二十も三十もありませうけれども、大體を別けると此の三つになる。それで上に立つ人は、例へば親が子に對するといふ時に、親だけの考ではいけないのであつて、主人として敬はれるだけの價値がなければならぬ、また師として模範になるだけの價値がなければならない、さういふ風に考へられる。だから親が子供を產んだから、子供は自分を尊敬するだらうといふやうな考ではいかんのであつて、親である以上は主人として仰がれる力を持たなければならず、また師として模範にされるだけの行ひがなければならない。それから今度は主人であれば、たゞ主人であるだけではいかんので、親として慕はれるだけのものでなければならぬ。また師として仰がれるだけの行ひが出來なければいかぬ。それからまた師といふ者であれば、たゞ先生であるだけではいけないので、親として懷かれるだけの德がなければいかず、また主人として尊敬されるだけの力がなければいかぬ、斯ういふ風に考へられるのであります。日蓮聖人の御書の中には始終さういふ事が書いてありますが、主師親といふのは三種のものではないので、親であれば主と師との力を具へなければならぬ、主であれば親たり師たる資格がなければならず、師であれば親たり主たる資格がなければならない。

さういふ風に考へて行けば世の中は面倒な事はありはしない。『自分は親父だから無理を言つたつて息子は言ふことを肯くだらう』といふ風に考へて居つては、それではいけない。『自分は主人だから、給金さへ出して居れば誰でも言ふ事を肯くだらう』斯う思つてはいかんのであつて、この上に書いた三つのものは、親であれば主と師を考へなければならぬ、主であれば親と師を考へなければならぬ、師であれば親と主を養ねなければならぬ。さういふ風に思つて居れば、世の中は文句はありはしない。また下の方の者もサウ思へばよい、子であれば、自分の親を親と思ふだけでなく、主として重んじよう、師として仰がう、斯ういふやうに下の方からも思ふ。自分は子であると共に、使はれる者であり、また弟子であるのだから、自分の親を主として仰がう、師として尊ばう、斯う思ふ。また人に使はれる者であれば、自分の主人を親として親しまう、また師として仰がう、斯ういふ風に、自分の上の人をたゞ上の人と思はないで、親とも思ひ、先生とも思ふ、さうすれば文句はないわけであります。また弟子であれば、自分の先生を先生とのみ思はないで、親とも思つて親しんで行かう、御主人とも思つて尊敬して行かう、斯ういふやうに思へば、主從の道といふものはやがて師弟の道にもなり、また親子の道といふものはやがて主從の道にもなる。斯ういふやうになつて行きまして、上の方で言へば主師親といふ三つが一つになるし、下の方で言へば子供であり召使であり弟子であるといふことが一つになります。

さうなつて初めて世の中といふものは本當に融合した、まとまつた善い世の中になるのです。それがどうもお互に考が足りないものですから、使はれる者がストライキをやるとか、息子が親父と喧嘩をするとか、親父が自分の息子を追拂ふとか、いろ〳〵なことになるのでありますが、要するに此の三つの關係は、三つだけれども一つだといふことがよく解りますと、本當に世間は善くなつて參るのであります。

こゝに『法王の子』とあるのはそれを敎へられて居ります。文殊師利といふ人は佛樣のお弟子でありますけれども、それを法王の子といつて、佛樣のお子樣だといふ、弟子であるけれども子と同じであるといふ意味に解釋して見ると、短い語でありますが、『法王の子』といふことが非常に意味が深くなつて來るのであります。

この文殊師利は、過去の世の無量の多くの佛樣に親近き、またこれを供養したものである。だから必ず、今自分達が眼の前に見たやうな、こんな不思議な事を前にも見て居つたらう。だからこの文殊師利に聞いて見よう。一體釋尊の白毫の光がこんなに遠くの世界までも照したといふことは、どういふ因緣であるか、此の事を聞いて見よう、といふ心持をおこした。

此の場合に、前の世と後の世の關係といふことを少しく述べて置きませう。これは、だん〳〵お經を讀んで行く間に御了解になることゝ思ひますが、吾々の生命は、今の世の五十年や七十年で終るものではない、前から生きて居るものである、さうして此の身がなくなつても、自分の生命が滅くなるものではなくして、後の世がある。斯ういふことは、單り佛敎ばかりではない、耶蘇敎であつてもマホメット敎であつても、苟くも宗敎であればみな敎へるのであります。この關係を解りやすく圖に描いて見ます

と、

斯ういふ永い生命の中の、これが現世です。それには前の世があつて、その前の世からの生命が現世に續いて居る。現世が五十年か六十年かわからんけれども、現世の生命が終れば、次に來世が來る、斯ういふ風に考へられるのであります。

ところでさういふやうな永久の生命があるからといつて、現世を輕く視るといふことは間違つて居る其の事はしつかり申して置きたいと思ひます。現世を輕く視るといふのは間違つて居る、たとひ現世は五十年、六十年であつても、それは永い生命の中の一部分であるのでありますから、チョウド竹の一節のやうなものです。竹が地面から生へて六尺も七尺も、或は一丈も伸びて居る、その中の一節といふのは一尺か二尺でせうけれども、しかし其の一節を輕く視るわけには行かない、ズッと續いて居るのですから……。だから現世に於ける生き方をいゝ加減にして置いて、人間として爲すべき事をしないで、人間として果すべき責を果さないでいゝ加減に此の世を送つて置いて、後の世に於て急に幸福にならうといふことを求めても、そんなことは出來るものではない。現世で吾々〳〵が人間として當に爲すべき事をし果すべき事を果して置いてこそ、後の世も幸福になるわけでせう。どうも朝寢をして晝寢をして、宵寢をして、饅頭を食つたり酒を飲んだり、伯父さん叔母さんに借金をして、友人に自分の支拂の尻拭ひをさして、さうして後の世になつて急に極樂に行きたい……そんなうまい事の出來るわけがない。若しそんな連中がみな極樂に行くなら、極樂といふ所は懈け者の屯集場みたいなもので、碌な所ではありはし

ない。來世を思ふならば、現世に於ての吾々の日常の行爲を慎まなければならぬ筈です。そこがどうも今までの佛教などに於ては、しつかりと教へられて居なかつたやうに私は思ふ。現世に於て人間の人間たる道を盡してこそ、後の世もやすらかではないか現世に於て人間として人間の道を盡さずに置いて、後の世に於て佛樣の御慈悲を受けよう――さういふ考へは、非常に弛んだ、まるで箍の外れた考ではないかと思ふのであります。

其の事をこの文章に合せて考へるとよく解ります今此の世に於て、文殊師利といふ方がお釈迦樣のお弟子の中に於て殊に勝れた方であるといふのは、前の世に於て、曾て過去の無量の佛樣に親しみ、また供養をして、佛樣に事へていろ〳〵修行をしたり、又その教を伺つて居つた其の結果として、此の世に於て殊に智慧のすぐれた人として衆に仰がれて居る斯ういふのであります。過去の世に於て修行をした結果、此の世に於て非常な智慧を具へて居るといふことを考へるならば、今度は現世に於て善い事をするならば、後の世に於て非常な智慧を具へ、非常な功德を有つものになるだらう、斯ういふことも考へられるのであります。

爾の時に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸〳〵の天龍鬼神等、咸く此の念を作さく、是の佛の光明神通の相を今當に誰にか問ふべきと。

（爾時比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及諸天龍鬼神等、咸作二此念一。是佛光明神通之相、今當レ問レ誰。）

その時に大衆の者も此の念を作した、是の佛（お釈迦樣）の光明を照された不思議な相を誰に問うたらよいだらう。佛の眉間から白毫の光を放つて東の方の世界をお照しになつたといふ事實は見たけれども、此の意味を誰に問うたらよいだらうか、自分達には一向わからぬ、斯う思つてみなぼんやりして居つた。

そこで大衆の者の代りに、彌勒が文殊師利に向つて其の意味を聞くことになるわけです。

爾の時に彌勒菩薩、自ら疑を決せんと欲し、又四衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷及び諸〳〵の天龍鬼神等の衆會の心を觀じて、文殊師利に問ひて言く。

（爾時彌勒菩薩欲二自決レ疑一。又觀二四衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及諸天龍鬼神等、衆會之心一。而問二文殊師利一言）

彌勒菩薩は、自分でもどうも解らぬから自分の疑も明かにしたい、また四衆といつて、比丘、比丘尼優婆塞、優婆夷といふやうな連中、或は天上から來た者とか、或は海から來た龍王とか鬼神とかいふやうな者も、どうも意味が解らんで困つて居るから、それ等の者等の弱つて居るその心持を察して、文殊師利に問うて申した。

何の因緣を以て此の瑞神通の相有して、大光明を放ちて東方萬八千の土を照したまふに、悉く彼の佛の國界の莊嚴を見ると。

（以二何因緣一而有二此瑞神通之相一。放二大光明一、照二于東方。萬八千土一。悉見二彼佛、國界莊嚴一）

一體どういふわけで、こんな不思議な、佛樣の白毫から光が出るといふやうな事があるのだらう。大きな光明を放つて、東の方の一萬八千といふやうな、殆んど際限もないやうな國土をお照しになるといふのは、一體何の意味だらうか。さうして其の光の中に、東の方の國々のいろ〳〵な『莊嚴』といふのは、得難い美しい相を今眼の前に見たのであるが、この美しい相はどうして見えたのだらうか、といふことを文殊師利に問ひました。

是に於て彌勒菩薩重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を以て問ひて曰く。

（於是彌勒菩薩、欲三重宣二此義一、以レ偈問曰）

彌勒菩薩は今大體のことを申したけれども、その

自分の尋ねる意味を更に詳しく申さうと思つて、偈を以て問うたのであります。

此の偈は長い偈でありますが、この中に書かれてあることは、これを昔の事と思つてはいかんので、これは佛道を修行する者の種々なる道、種々なる信心の仕方を說かれて居るのでありますから、これを三千年の昔の事と思はないで、吾々佛の道を修行する者として、此の中のどれでも宜いから、自分に一番縁の近い所から、こゝに書つらねられてあるどれかを一つ縁として、そこから入つて行かう、斯ういふ心持になつて下されば有難いと思ひます。人間は自分の境遇、自分の周圍の事情等に依つて制限されるものでありますから、みな同じわけには行かない皆の顏つきが違ふ通りに自分の心の持ち方が違ひます、また自分の境遇事情が違ひます。けれども何處からでも入つて行けば宜いのです、何處からでも自分に與へられた縁に依つて入つて行きますと、結局は佛の境界にまで入れるといふことは、佛樣が敎へて下さつて居るのであります。ですから各々が自分の與へられた縁に依つて、何處から入つて行つても宜しい、その與へられた縁を無駄にしないやうに入つて行つて下されば、結局は佛の境界に到達することが出來るものと思ひます。さういふ意味で此の偈を讀んで參りたいと思ひます。

文殊師利
眉間白毫の
大光普く照したまふ。
導師何が故ぞ

（文殊師利　導師何故　眉間白毫　大光普照）

『導師』といふのは佛樣のことを謂ひます。これは引導といふ語から來て居る、この頃葬式に行つて見ると、棺の前へ立つて坊さんが何か言ひます、あれを引導を渡すといふ、引導といふのは死んだ人に對して極樂へ行くやうに言渡しをすることのやうに思ふけれども、さうではない。引導といふことは、引出すといふことゝ、導入れるといふことです、ナニ

も死んだ時の文句ではない、迷つた人間を迷ひの中から引出して、それを導いて迷はない方に入れることです。だから吾々が物を習ふといふことは、要するに引導を受けるわけです。

わかり易く申しますと、例へばこゝに部屋が二つある。右の方は電燈も瓦斯燈もない眞暗な部屋、左の方は電燈か瓦斯燈か知らんけれども燈火がついて居つて、隅から隅まで見えるやうな明るい部屋です この暗い部屋に居る者が凡夫の境界であり、明るい部屋に居る者が覺つた人（聖といふのは覺つた人）の境界です。私共はお經を讀んだり、いろ〳〵理窟

を言つて居りますけれども凡夫です、人が少し難かしい顏をすれば腹が立ちますし、そこらに綺麗な物があれば欲しい、所謂貪欲の心持がおこります。どうも境遇に惹かれて始終心が動きます、これが凡夫の境界です。ところが、どんなに境遇が變つても、周圍の事情が違つても、さらに心を動かさぬといふやうな人もあるでせう、さういふのが所謂聖といふ覺つた人の境界です。

そこで此の凡夫の境界、眞暗な、燈明もナニも見えないやうな部屋に引込んで、お互に迷つたり悶えたりして居る者に對して、覺つた方の人々が、これはまことに氣の毒だ、あんな暗い所に居つて、始終悶えたり苦しんだりして居つては、ほんとうに可哀相だと思ひまして、此の暗やみに居る人々を、どうかして暗やみから離れて明るい境界に入れるやうにしたいと思ふのです。自分達の方は明るい、向ふは暗いのですから、暗いところに居る者を明るい方へ

伴れて來て入れてやりたいと思ふ、そこで先づ南方の部屋の間の仕切を開けるのです。さうすると明るい部屋の光が暗い方へサッと入つて來る、これが所謂說法、敎を說くといふことです。佛が敎を說くといふことは、要するに明るい方の光を暗い方の部屋に向けることであります。『お前達は暗い部屋に居て可哀相なものだ、眞暗やみで額をぶつけたり、足を踏まれたりして馬鹿な事をやつて居るのだ、そんな事ではいけないぞ、こつちの明るい方へ入つて來い』と言つて奬められる、それが佛の說法です。さうすると此の暗い部屋に居る者は、急に明るくなつたから吃驚してしまふ、今まで暗い所に馴れて居つた者が、急に隣りの部屋の仕切が開けられて光がサッと入つて來たものですから驚いてしまふ。その中の比較的頭腦の善い者は『なるほど、こんな明るい所があるのだナ、それなら自分も明るい方へ行きたいナと思つて、明るい方へ寄つて來る。ところが頭腦の惡い者は、光が射したので吃驚してしまふ。『これは大變だ、何だか變なものが見えて來たナ』と思つて、光を避けて、わざ〳〵暗い方へ隱れて行きます。これが今の世の相です、今の世の相はさうでせう、折角尊い敎があつてもその敎を畏れて、わざ〳〵自分が暗い方へ隱れて行く、だから敎に親しむ機會が無いのです。私はツク〳〵今の世の相はそれではないかと思ふ。折角光がさすのですから、その光の中に入つて行けばよいのに、急に光がさすので驚いて、わざ〳〵蔭の光の届かない所に隱れてしまふ者が多いのです、それでます〳〵敎に遠ざかつて行きます。私共同じ時代に中學などを卒業した友人に時々會ひますと、よくさういふ事を申します。『小林ッ、君は此の頃佛敎の事などをやつて居るさうだ、俺も聽きたいと思ふのだけれども、佛敎の事などを聽くとどうも儲けることが出來なくなるからその內ウンと儲けたら其の時に聽くから……』私

は言つてやる『そんな事を言つて儲からない內に死んだらどうするのだ』『イヤ當分死にやしないョ』……これは光を怖れて成べく蔭に隱れて居るのです敎などを聽くと儲からないと思つて居る、だからウンと儲けてそれから聽かうナンと言ふ。それではいけない、光が照して來たら、先づ何を措いても其の光の中に入らなければいけない。

佛樣の眉間の光がサッと射した、その光の中に入つて居る者は人生の眞實の意味が解る。その光の中に立つことを怖れて、暗やみに隱れようといふ心持を持つて居る者は、いつまで經つても人生の眞實の意味が解らないのです。ですから自から光の中に入らうといふ決心をしなければならぬ、それが所謂發心であります。人間が發心するといふのはさういふ事です、暗やみの內から明るい方に入らうといふ心持をおこすこと、それが發心です。發心しない者はどうも仕樣がない、いつまで經つても暗やみに居つて、明るい方に入つて來られない。佛樣はどうかして大勢の人間を暗い中から引き出して、さうして明るい方に入らしてやりたいと思つて敎を說かれます、それを導師と申します。

導師――吾々を導いて、此の暗い所から明るい所に引出して下さるお方、即ち佛樣は、何の故に眉間の白毫の大きな光を以て普ねく照して下さるのだらうか。

曼陀羅　曼殊沙華を雨して
栴檀の香風　衆の心を悅可す

（雨二曼陀羅　曼殊沙華一　栴檀香風　悅二可衆心一）

曼陀羅華、曼殊沙華といふのは、前に申したやうに白い蓮の華や紅い蓮の華が空から雨り、栴檀の香のある風がサッと吹き渡つて、その風にあたつた大勢の人の心持を悅可するといふのは、悅びに滿ちた、何とも言へない有難い心持になつて來る。

是の因緣を以て　地皆嚴淨なり

而も此の世界　六種に震動す

（以二是因緣一　地皆嚴淨　而此世界　六種震動）

空から華が雨つたり、香のある風が吹いて來たおかげで、地面が嚴淨といつて美しく淨らかなものになつた。

これはズッと先へ行くといろ〳〵委しい說明がありますけれども私共の住んで居る世界を娑婆と申します。娑婆といふのは堪忍をするといふ意味で、此の世の中は我慢しないと居られないといふのです。お互に我慢しないと居られないでせう、道路を歩いても雨が降ると泥が一パイで、そこらを歩いて居ると自動車が泥を刎ねかす、實に不愉快です。それなら自動車に乘つて居れば滿足かといふと、自動車に乘つて見ると往來の人間が彼方へ行つたり此方へ行つたりして邪魔で歩けない、やはり我慢しないと居られない。そこで此の世の中はお互に我慢しなければ一日も暮して居られませんから、この世の中のことを娑婆と申しますが、佛樣の居らつしやる所はこんな事はないだらうといふので、佛樣の居らつしやる所を寂光土と申します。寂といふのは變化しないといふ意味、いつまでも變らず光を以て照されて居る場所であります。此の娑婆世界はまことに嫌な事ばかり多くて、我慢しなければ生きて居られないのでありますが、佛樣の居らつしやる所は寂光土であつて、いつでも變化のない、いつでも光を以て滿されて居る所であります。ですから此の娑婆世界を離れて寂光土すなはち佛の國に行きたい、といふ望をおこすのは人情の當然であります。ところが娑婆世界を離れて寂光土へ行かうと思つても、前にも申したやうに、此の世に於て間違つた行ひをして居る人間が極樂淨土へ行つたのでは、其の極樂淨土はチッとも極樂にならぬのであります。そこで此の娑婆世界に於て人間としての道を盡して、ナニも極樂淨土といふやうなものを西の方にも東の方に

も求めるには及ばない、此土に極樂淨土を實現しようではないか、といふことが大乘佛敎の根本の精神であります。それを『娑婆卽寂光土』と申します卽といふのは不離といふ意味で、此の娑婆世界を離れずして、此の世の中にお互が生きて居りながら自分達の心持を建てなほして、此の穢ないと思つて居る泥の上に、寂光土すなはち極樂淨土を實現しようではないかといふことです。それが法華經の根本の精神です、お互に此の穢ない土の上に極樂淨土を實現しよう、極樂を西に向つて探したつてありはしない、東に向つて探したつてありはしない、お互の心の持ち方に依つて世界が變るのであるから、此の穢ない土の上に極樂淨土を造らうではないか、其の極樂淨土を造るために役に立つ生き方をするならばお互の一生といふものは本當に意味があるのではないか、斯ういふことを徹底的に敎へられたものが法華經であります。

人間はいつまで生きられますか、皆さんは元氣な顏をして居らつしやるが、百歲までは生きはしないでせう。大概の人は五十か六十かで死ぬのです、百歲まで生きる人はありはしない。假に百歲まで生きたとしても、老碌してたゝ生きて居るだけなら生きて居ても居ないと同じことです。人間の生命といふものは儚ないものです、限のあるものです、その限ある生命の中に於て自分の一身の利害得失ばかりを考へて、『人はどうでも自分さへ良ければ宜い』と考へたところが、六十歲になり七十歲になつて、眼がかすんで、齒が拔けて、耳が遠くなつた時に、何物が人間を幸福にしますか。美味い物があつたところで、齒が拔ければ美味くも何ともなくなつてしまふ。綺麗な色を見たところが、眼がかすめば綺麗でも何でもなくなる、美い聲だといつても、耳が遠くなれば聞えやしません。そんな儚ない物質的の一生を送つて、たゞ綺麗な色が見たい、美い聲が聞きた

い、美味い物を食べたいと思つて居るならば、その人の一生は殆んど意味がない。健康な時だけは良いでせう、しかし自分の身が衰へて來れば、一切が零になつてしまふ。たゞ吾々が此の世の中に生きて甲斐のあるのは、自分が一生涯生きて居る間に幾分なりとも善い事をして、自分の家、自分の村、自分の町、この周圍のものを少しでも淨らかにして、やがては娑婆即寂光土、此の土の上が極樂淨土になるといふ、此の大事な仕事に少しでもお役に立つた、聊かなりとも貢献が出來たと思つた時に、私共は安らかに此の一生を送ることが出來るのであります。

それを考へなければいけない。日蓮聖人が、先づ臨終の事を習うて然る後に他の事を習へと仰しやつたのは、その意味です。今私が、自分が今晩死ぬと考へた時にどうでせう、自分は今死んで行くのだが、此の世に生れて生れた甲斐があつたかナ、と思つたときに、自分のした事が、此の世の中を極樂淨土にするといふ事にお役に立つやうな事を、こればかりでもして居たら、生れた甲斐があつたでせう。それがチットモ出來ないで死んで行くならば、何しに生れて何しに死ぬのか少しも解りはしない。そこを本當に考へなければならない、その考が無くして一生を生きるといふと、人生の意味はまるで解らないのであります。

私共の努力に依つて、險惡なる世の中が幾らか温和な世の中になり、面倒な世間が少しでも安穩になるならば、今こゝに申す『地皆嚴淨なり』穢ない土の上が少しは明るいものになり、チットは美しいものになるといふ望がおこされるわけです。どうぞさういふ心持を以てお互が毎日を過したい、毎日をそんな氣分で送るやうになりたいと思ひます。斯く申す私自身もまことに凡夫でありまして、つまらない考ばかりおこります、けれども何とかしてお互がさういふ心持を以て、この娑婆世界の穢ない土の

上に極樂淨土を實現するために、少しでもお手傳ひをしたい、幾らかの力になりたいといふ心持を以て毎日を送つて參りたいと思ひます。

『是の因緣を以て地皆嚴淨なり』本當に皆が佛の教を信じて行きますと、地面がみな美しい淨らかな所になります。さうして『而も此の世界六種に震動す』これは前の方にもあつたやうに、佛様の教を聽いて人間ばかりではない、すべてのものが皆感動したといふ心持をあらはして居ります。

時に四部の衆　咸く皆歡喜し
身意快然として　未曾有なることを得つ

（時四部衆　咸皆歡喜　身意快然　得未曾有）

みなの者が歡喜んで、身も心ものびゝとしてよい氣持になつて、今まで曾て覺えないやうな悦びを得た。

眉間の光明　東方
萬八千の土を照したまふに　皆金色の如し

（眉間光明　照于東方　萬八千土　皆如金色）

佛様の眉の間から出た光が、東方萬八千といふ非常に遠い所までを照して、黄金の光のやうに周圍が照りわたつた。これは佛の教に依つて世の中がみな明るいものになることをあらはして居ります。

阿鼻地獄より　上は有頂に至るまで
諸の世界の中の　六道の衆生
生死の所趣　善惡の業緣
受報の好醜　此に於て悉く見る

（從阿鼻獄　上至有頂　諸世界中　六道衆生　生死所趣　善惡業緣　受報好醜　於此悉見）

『阿鼻地獄』といふ地獄のどん底の情けない境界から、上の方は『有頂天』まで、諸の世界の六道の衆生、迷つた人々の『生死』といふのは世に於ける行ひ、『所趣』といふのはその行ひの報として生れる世界『善惡の業緣』報を受けるところの善いとか惡いとかいふ、そんな區別が『此に於て』といふのは

その光の中に於てみな見えたといふ。

これから以下は、佛樣の敎をお與へ下さる樣子と一般の人が佛の敎に依つて修行して行く、その修行の方法とを說き明してあるのであります。

又諸佛　聖主師子
經典の　微妙第一なるを演說したまふ
其の聲清淨に　柔輭の音を出して
諸の菩薩を　敎へたまふこと無數億萬

（又覩諸佛　聖主師子　演說經典　微妙第一　其聲清淨　出柔輭音　敎諸菩薩　無數億萬）

『聖主』といふのは、聖は覺つた人、主は大勢の人を導く人といふ意味、『師子』といふのは、印度に於ては最も勝れた人を師子に譬へます。師子といふものは、百獸の中に於て最も力のある强いものだといふ意味にも考へられますけれども、そればかりではない、別の意味がある。

師子兎を搏つこと、猶ほ象を搏つがごとくす。

（師子搏ゝ兎猶搏ゝ象）

といふ語があつて、師子といふ獸はどんな場合でも決して油斷をしない。兎といふのは小さい獸ですから、兎を師子が搏つのに――搏つといふのは、師子は長い尾があつて『あの尾でパッと搏つ、さうすると大概の獸はみな搏たれて倒れるさうであります』が、師子が兎を搏つ場合に、兎だからといつて馬鹿にしない。象といふのは大きい獸でありますが、その象を搏つと同じやうな心持で、全身の力を籠めて兎を搏つといふ、それを謂つて居ります。相手が强いものだから力を入れる、相手が弱いものだからいゝ加減にする、といふやうな事はしない。兎を搏つ場合でも象を搏つと同じやうな心持で、全身の力を籠めて搏つ、といふのであります。これが人間の模範である、大事な事だから熱心にやる、小さい事だからどうでも宜い、斯ういふ風に思つてはならぬのであつて、人生は際涯もなく變化するものであります。

大事な事と思つて居ることが案外輕く過ぎて行くこともあります、これは小さい事だと思つて居ることが思ひがけない大きな結果をおこすこともあります。だから自分の當に爲すべき事は、大きい事、小さい事を問はず全力を注いでやらなければならぬ。その意味で、兎を搏つ場合にも、師子を搏ち象を搏つと同じやうに全力を注いでやる、これがまア師子の師子たる所であるといふ風に言はれて居ります。私共が世の中に立ちまする場合に、いつでもさう思はなければならぬのであつて、これは何でもない仕事だから間に合せて置けば宜い、といふ風に考へて、小さい事を兎角疎かにしやすいのでありますが、その小さい事が後になつて見ると大きな結果を生ずることもあるのであります。

それを考へて佛樣を師子に譬へたのであります。佛樣は、非常に偉い人間に向つても、まるで物の解らないやうなつまらない人間に向つても、同じお心持である、これは下らない奴だからいゝ加減にして敎へてやれ、といふやうなお心持はない。苟も人間であれば、國王であらうが乞食であらうが大學者であらうが、同じく人間であるのだから、自分の心のあらん限りの力を注いでこれを覺らせよう、敎へようといふ心持を持つて居られる。それで佛樣を師子に譬へます、兎を搏つこと象を搏つが如くすると ころの師子と同じやうに、いつでも全力を注いで居らつしやる、その事を師子と申します。

『聖主師子』大勢の人間の先生であり主人であるところの師子のやうな心を有つて居らつしやる佛樣が「經典の微妙第一」佛の敎の非常に勝れた事をお敎へ下さる、そのすがたが今こゝに坐つて居つてもスッカリわかる。

さうしてその佛樣が敎をお說きになる場合には、非常に淸淨で、柔輭といつて人の心の奧の奧までも入りやすい聲をお出しになつて、諸の菩薩を敎へ

たまふ。その教は「無數億萬」といつて數限りなき教がある。

梵音深妙にして　人をして聞かんと樂はしめ
各〳〵世界に於て　正法を講說し
種種の因緣と　無量の諭を以て
佛法を照明し　衆生を開悟せしめたまふを覩る

（梵音深妙　令二人樂聞一　各於二世界一　講二說正法一　種種因緣　以二無量諭一　照二明佛法一　開二悟衆生一）

さうして佛樣の教を說かれる梵音――「梵」はきよいといふ字であります、きよらかな御聲は、深く不思議な力を具へて居りまして、人々をして聞かんと樂はしめる、みな佛の教を有難いと思つて聞きたがるやうな心持になる。さうして各の世界に於て正しい法を講說する各といふから、人々がその教を聞きますと、聞いただけでは濟まない、自分が有難いと思つたならば、その有難いと思ふ事をかならず他の者に分けてやらなければ濟まないやうな氣分になつて來る。

覺るといふことは、自分が覺るだけでなくして、他の人を覺らせたいといふ氣分がおこるものです。即ち

覺――自覺
　　――覺他

自覺といつて自分で覺るのと、覺他といつて他の人を覺らせるのと、兩方のはたらきが伴ふものです。例へば往來を歩いて居つて急に雨が降つて來た、「自分は傘を持つて來たからいゝあんばいだ」といふので、傘をひろげて歩いて居ると、そこに傘が無くて濡れて居る人がある。さうすると自分一人濡れないで居ては、濡れて居る人が氣の毒だから「あなた、お入りなさい」と言つて、濡れた人を同じ傘に入れて濡れないやうにしてやるといふことは人情でせう、それと同じです、自分が佛の教を學んで、少しなりとも人間としての意味が解るならば、他の者

をどうかして自分と同じ心持にしてやりたい、あの人々はチツとも道も教もわからない氣の毒な者だ、一人でも宜い、二人でも宜い、自分と同じ教の中に入つて、同じやうに人間の道の片端でも宜いから辨へて一生を送らしてやりたいと思ふ、これが人情でせう。であるから覺るといふことは、自から覺るばかりではない、覺他といつて人を覺らしめる、斯ういふ心持がおこるわけです。そこで人を覺らせたいと思ふと、人に理窟を言ひながら自分が間違つた行ひをして居つては濟まないわけです。人には腹を立てゝはいけないと言ひながら、自分がチヨツト足を踏まれたからといつて「此の野郎ッ」と怒鳴つたのでは申譯がありませんから、自分の行ひを氣をつけることになる。そこで自覺と覺他とは所謂相持で、自分が覺れば人を覺らせたい、人を覺らせるためには自分の行ひがいゝ加減ではいけないから、モツト善い行ひをする、自分が善い行ひをすればそれが又人に教を與へる、といふ風に、自覺に依つて覺他を生み、覺他に依つて自覺を促すやうになつて行く、それが所謂菩薩道です。本當の菩薩の道といふのはそれです、自分の事ばかり考へて居つたのでは、一生涯といふものは殆んど無意味になつて行く。といつて人に教へようと思へば自分の身を慎まなければならぬわけでありますから、そこで自覺と覺他と兩方を相持にしてこれを進めて行くのであります。そのことを言つて居ります。

佛の教を學んだ者は「正法を講說し」その佛の正しい教を人に說きまして、さうして種々の因緣、無量の譬喩を以て佛法を照明し、あきらかにして、衆生を開悟せしむるといつて、大勢の人間の迷を除いて覺の道に導き入れるわけです。その有樣を、佛樣の眉間の光の中から覩てとることが出來たといふのであります。

若し人苦に遭ひて　老病死を厭ふには

爲に涅槃を說きて　諸苦の際を盡さしめ

（若人遭レ苦　厭二老病死一　爲說二涅槃一　盡二諸苦際一）

これは凡夫のことです、普通の人間が人生の苦に遭うて、年を老るとか、病氣をするとか、死ぬとかいふ事があるのを考へて、「ハ、ァ此の世の中はどうも思ふにまかせない世の中だナ」といふやうな心持をおこす者があるならば、その人間に對して涅槃を說く――涅槃といふのは、そんな苦みや惱みを除く狀態です。涅槃といふのはいろ〳〵な說明がありますけれども、本當の意味は滅といふことです、滅するといふのは何を滅するのかといへば、極く簡單に考へれば死んでしまふことです、死んでしまへばみな滅なりますから、涅槃といふのは死ぬことにも言ひます。しかしながら宗敎の意味で言ふと、人間の身が死んだつて生命は滅なりはしない、だから死ぬといふことは、この身が役に立たなくなるだけの話であつて、人間の本當の生命は滅なりはしない、だから死んだつてそれでお終ひではない。

本當の滅といふのは覺ることです。迷つて居たんでは仕樣がない、此の世の五十年か七十年が終つたつて、後の生命がやはり迷ひで、やはり苦みであれば、何にもなりはしない。迷ひがなくなれば永遠に平和である。永遠に悅びに滿ちて居る。だから本當に滅するといふことは人生の面倒な關係を離れることであつて、その離れるといふことは覺るといふ事である。つまり滅するといふことゝ、覺るといふことは同じです。たゞ死んでしまふだけではつまらない。死んで身がなくなつたつて、心は滅なりはしない、やはり來世で苦みを受けなければならぬ。そこでどんな境遇に居つても苦みや惱みの無いやうな心持を持つて居れば、生きて居る間は生きて居る間で泰らかに居られるし、この身が役に立たなくなつたら、身は捨てゝしまつて、後の生命に於てまた安泰な生活が送れるわけであります。それを覺らなけれ

ばならぬ、それは、金が儲かつたから嬉しいとか、損をしたら落膽するとか、人が褒めたら有頂天になるとか、人が惡く言つたら血眼になつて嗔鳴るといふやうな、さういふ心持をスッカリ無くすること、それが本當の滅です、それが眞の意味の涅槃です。

「涅槃を說く」さういふことを說いて、「諸の苦の際を盡さしむ」苦の際といふのは苦の極限のこと、いろ〳〵な苦みの極限までも無くなるやうにお敎へになるといふのであります。

若し人福有りて　曾て佛を供養し
勝法を志求するには　爲に緣覺を說き

（若人有レ福　曾供二養佛一　志二求勝法一　爲說二緣覺一）

これは人間の生命を此の世だけと考へないで、前の世に於て佛樣に供養することがあつて、さうして勝法を志求するといふのは、人間として世に生きる甲斐のある生き方をしたい、斯う思つて勝れた敎を求むる者がありますれば、その爲に緣覺を說く。緣覺といふのは、緣によつて覺るといふ意味です、人間の覺り方はいろ〳〵あつて、人に聞いて覺るのも一種の覺り方であるけれども、人に聞いただけでは本當のものにはならぬのであつて、緣によつて、緣といふのは日々出會ふ事柄です、その事柄を見て「なるほど此處だナ」と思つて覺る、それが緣覺です。人間はいつ死ぬかわからないものだ、斯う言つてもそれ程に感じない、ところが自分の身內に、若くて死んだ人があると、「なるほど人生は儚ないものだナ」といふことが本當にわかる、それが緣覺です。吾々の每日出會ふところの出來事でも、何でもないやうに見て居ればそれまでゝありますけれども少し氣をつけて見ますれば、日々出會ふ出來事がみな吾々の覺りの緣になるのであります。

人生といふものを無意味に見れば無意味です、しかしながらよく考へて見ると、吾々の眼の前に起つて來る一切の出來事が、みな吾々の覺りを促して居

るのです。金に不自由の無い人がフッと死んで行く勢力のある人が忽ちにしてその名聲を失墜する、斯ういふやうな事を眼の前に見ますと、「なるほど人間として人間らしい生き方をしなければつまらないではないか、金だの名譽だの、そんな事ばかり考へて居ても、それはいつ無意味になつてしまふかわからぬ」といふ事が本當に解る、それが緣覺です。日常の出來事に依つて本當の覺りを開く、それが出來なければつまらないわけです。眼の前にいろ〳〵の出來事を見て居ながら、たゞ新聞の記事を見て「あすこにも五人殺しがあつた……此處にも三人殺しがあつた……」そんな事ばかり考へて居つては仕樣がない。

それで深く考をおこして居る者には、所謂緣覺を說くといつて、お前達の日常の出來事に依つて、眞に世の中の名譽とか、地位とか、位とか、金とかいふやうな事ばかりを求めて居るのは無意味だ、といふことを覺れと敎へてやる、これが緣覺を說くといふことであります。

五〇

若し佛子有りて　種種の行を修し
無上慧を求むるには　爲に淨道を說きたまふ

（若有二佛子一修二種種行一求二無上慧一爲說二淨道一）

なほそれより進んで、佛子といふ、本當の佛のお弟子の人々があつて、種々な行ひをして、無上慧を求める、無上慧といふのは佛樣の智慧です、佛樣と同じやうな勝れた智慧が欲しい、といふやうに考へて行く者があれば、その爲には淨道を說く、淨い道といふのは菩薩の道であります。

菩薩の道は何處から入つて行くかといふと、四心相應といつて、四つの心持を持つことから入つて行く。四つの心持といふのは

慈
悲
喜

捨

であります。私共が世の中に立つに方つては、此の四つの心持を持つて居ないと世の中に立てない、若し此の四つの心持を持たないで世の中に立つならば世の中は非常に苦しいものになつてしまふ。

「慈」といふのは、自分の存在することに依つて周圍の人が少しでも幸福になるやうに、斯う思ふのが所謂慈心であります。「悲」といふのは、自分が生きて居ることに依つて周圍の人が少しでも苦みや惱みを除かれるやうに、斯う思ふのが悲心であります

それから「喜」といふのは、大勢の人が幸福になつたならば自分も一緒に喜んでやりたいといふ心持です。凡夫の心持は、他の人が幸福になるとそれを嫉んで、他の人の喜びを少くしたい樣な氣がする、人がひどい目に遭ふと却つてそれを自分の喜びとするといふやうな淺ましい心持がありますから、それを除いて、他の人の喜びを飽まで自分の喜びとしたいといふ心持、これが喜心であります。「捨」といふのは、自分が人の爲に骨を折つたからといつて、その骨折つた事を忘れることです、「俺が彼奴の爲に骨を折つてやつたんだ、彼の店が繁昌するのは俺のお蔭だ」ナンと思つて居ると、向ふのお禮の言ひ方が足りないと腹が立ちます。それでは世の中はうまく行きませんから、自分の骨折つた事はサラリと忘れてしまふ、斯ういふ心持が「捨心」であります。

つまり慈といふのは、自分の存在に依つてどうぞ皆が幸福になるやうに、悲といふのは、自分の生きて居ることに依つてどうぞ周圍の人が少しでも苦勞が少くなるやうに、喜といふのは、人が幸福になつたら一緒に喜んでやらう、捨といふのは、自分が骨折つた事などはサラリと忘れてしまふ、自分が骨を折つて人からお禮を言はれないでも何ともない、ナニ自分の骨折などは勘はない、他の人が幸福になつたらそれで宜いではないか。此の四つの心持を搦

へて持つのが菩薩の心持であります。こゝに淨道といふのは、淨い心持を以て世の中を通つて行く道、即ち菩薩の道であります。

「淨道」といふのは短い語でありますけれども、淨の字が非常に大事です。淨といふのは、自分に報ひを求めたいといふ心持を捨てなければ淨くならない子供を育てゝ、その子供に孝行をさせて自分が樂にならうなどゝ思つて居ると、子供は大きくなつて、どうも親父は頭腦が舊いなどゝ言ひ出す、報ひを求めようといふ心持では到底淨くならぬ。であるから「捨」といふ心が誠に大事です、自分の努力した事は、それが結果が良くなれば宜いので、自分にお禮を言つて貰はうとか、自分に報ひを求めようといふ心持をスッカリ捨てゝしまふ、それが本當の淨らかな道で、そこに初めて自分の一生といふものが意味があるのでありますから、その淨道を說かれる。お前達人間として生れたらば、菩薩の道を行じて行かなければいかんぞ、菩薩の道といふのは世の爲、人の爲に力を盡して、その報ひを求めないところの心持、それが本當の菩薩の道である、といふことを說かれるのであります。

吾々の一生涯を幸福にしようと思ふならば、骨折つてその報ひを求めないといふ心持を作らなければいけません。報ひを求めたい〳〵と思つて居つたらそれは不幸なものです。どうして此方の思ふ通り、人が思ふものではない、親が一生懸命に子供を育てゝも、子供は親の有難さを十分の一も二十分の一もわかるものではない。世間の爲に骨を折つても、世間はその努力を十分の一も二十分の一も理解するものではない。報ひを求めようといふ心持が毛筋ほどもあるならば、その人の一生涯は本當に不幸です。自分が善い事をして、その事に喜びを感ずるといふ心持があつて、初めて自分の一生といふものが安泰に行くのです、それを淨道といふ、周圍に向つてナニも求めない心持、それが淨い道です。

その淨い道を說き示して、それが本當にわかればどんな境遇に居ても、どんな事情の下に居ても、皆が喜んで行くことが出來ますから、これを說かれたのであります。さうして佛樣は、一切衆生の苦みは自分の苦みとして、一切衆生の喜びを自分の喜びとして、世に出て敎を說かれたのでありますから、その佛の心持を自分の心持として皆がやつて行かなければならない譯であります。

文殊師利　我此に住して　千億の事に及べり
見聞すること斯の若く

（文殊師利　我住ニ於此一　見聞若レ斯　及ニ千億事一）

この根本が大事です。佛の心持を自分の心持とするやうになれば、どんな事をやつたつて善い事はキッと出來るので、どんな境遇に居つても、其の人のやる事がみな世の爲、人の爲になるのでありますから「千億の事に及べり」數限りない事を、みな佛の慈悲のやうな心持で實行する、この根本を一つ自分は捉へたといふのです。

是の如く衆多なるを　今當に略して說くべし

（如レ是衆多　今當ニ略說一）

けれどもさういふ根本の事だけではいかんから、さういふ心持で佛の道を修行する人の樣子を略してザッと說いて見よう。心持の基礎は一つだけれどもその一つの心持で修行するのに、どんな修行の仕方が出來るだらうか、どんな事が緣になつて自分の覺を開けるだらうか、その覺を開く道筋を、略して——それは無限の事であるけれども、ホンの少しばかり、二つ三つこゝに並べて話して見よう、といふのであります。

これから、佛道の修行を致しますその修行の方法をいろ〳〵並べてあります。これを昔の事と思はないで、お互ひ自分の身にひき比べて、自分はこれに近いナと思つたら、その近い道から入つて行けば宜

い。人はみなそれ〴〵の境遇事情が違ひますから、結局行き着く先は同じでありますけれども、そこへ入つて行く道はいろ〳〵あります、ですから其の中で、これが自分に近いナと思つたら、その近い所から入つて行つてだん〳〵修行を積んで行けば、結局佛の境界にまで行かれるわけであります。次講からこれを讀んで行きまして、自分の入り易い道を此の中から探して、その捉へた道から眞直に入つて行くやうにして、お互の修行を勵みたいものだと存じます。

（第七講了）

記事と教報

西の旅

礒部滿事

長州鶴城の同志で、お醫者さんといふよりは寧ろ日蓮主義の先生としての方が有名な小高さんから、近頃は毎月こちらでも座談會を催しては居るが、一度來てはどうかとの御招きをうけ素より願ふ處と悅んで參加させて戴くことゝした。

六月十五日　朝九時、東京發の特急燕で西下、午後二時半中京名古屋驛で、石上さんにお遇ひ出來て有意義に通過し、同五時過には早くも京洛二條の本山妙滿寺に安着し、直ちに川崎本山部長と敎化講演會開催の件に就て協議し、終つて二三代前の本山部長であつた私共と特別關係の深かつた隨喜院日刀上人の墓前に自我偈と唱題を捧げ、それより大急ぎで京都驛に走つた。

同七時半、煙の都といはるゝ大阪の蓮成寺に久々で吉永上人とお遇ひし、又京藤上人並に立正青年團の幹部である清原さん、吉田さん、井上さん、其他の諸氏と敎化講演會開催の件を熟議し、そこには恩師日生上人の法衣で謹製された立正青年團旗を拜しつゝ、時代對應の運動方法を練つたりして十一時を過ぐる迄も護法愛國の至誠を披瀝され、實に意義深い集であつた。同夜は吉永上人の御歡待に甘えて恩師御染筆の除世熱惱致法清涼の篇額の下に安らけき眠りを結んだ。

同十六日、恩師の御命日である。朝の勤行も心ゆくばかりに營まれ得たことは洵に有り難い次第であつた。齋を頂いてから今曉より降り出した慈雨の中をば、北田邊の友廣家と附近の昭和町の安江家を訪づれ、夫より神戸へと急行した。

同午後三時過、立正寺に近津上人を訪れた。これより前、藤本さんは態々兵庫驛迄お出迎へ下さつて居たことは誠に勿體ない思がした。此所でも敎化講

演會開催の件を議し、それから姫路の妙善寺（本多上人の生家國友家並に我家の菩提寺）の展墓が急がるゝまゝに、一泊するやうにと近津上人の御懇情をも振切つて、豫定通り晩八時故郷の土を踏んだ。少年の時に一方ならぬお世話を蒙つた中島家に立寄り倶に連立つてお墓詣りをして戴いた、見ると妙善寺の方丈は今春改築されて面目一新、そこに森田上人始め檀徒諸氏の御努力もさこそと拜された。此地に於ても教化大講演會を開催してはと相談したが、そこにある障害があつて實行に到りさうにもないことは全く遺憾で、かゝる因緣は一日も早く三寶の御前に大懺悔を致すべきなりと深く自らも慚愧に堪へない。やがて再び中島家にお寄りした、知命の坂を越えた身を猶昔しの子供のやうにいたはり下さる御厚情に自ら熱い點滴がつたふ、生母を喪つた身には今こゝに我悲母にお値ひせる心地がして感慨無量である。次からつぎへと昔し話に時の移るのも忘れたが漸く心付いて時間に促され、種々引留めらるゝ中をば拜謝しつゝ、中島家慈母に眠れる市中を十丁あまりも、その自身お歸り路の淋しいのも、お疲れをも厭ひなく送られて、十一時四十一分の特急櫻に飛び乘つて最後の目的地へと向つた。

同十七日、梅雨晴れて朗かな曙光を浴びつ、親しみ深い山陽沿線を見惚れる間に、早やくも三田尻驛に到着した。此所より省營自動車に乘換へて七時過萩に向け疾走する、約一時間ばかりすると山口市を巧に通過し、それから三四十分後には防長の國境へと差懸る、八丁峠の嶮を幾轉となく迂曲し、森々たる青緑に、金線を浴びた連峰を眼下にして、我知らず快哉を呼ぶ絶景を送迎する數十分、かゝる仙境の靈氣を滿喫して、今迄の睡眠不足も疲勞氣分も一掃し得たことを歡ぶ。この連絡は最近の開始とか、登りつめて暫らくは平坦といふことは出來ないけれ共そこに若干の田畑もあれば山家もある、而して其一茅屋に日の丸國旗が篇々と風に搖られて居る、即ち此の日は秩父御名代の宮殿下お歸りを迎へる爲めに赤誠の表れが、誰れも見ないやうな山中にさへ實現されてゐるのである。これこそ國寶ではあるまいかこの國民性あればこそ日本は今日の世界驚異の標と

なるのではあるまいか。こんなことを思ふ間に坂を下つて長門峽に來た時には、日本海からの軟風が夏密柑の香を薫して新來の客の鼻をそゝる、モー近づいたかと思はしむる刹那踏切を越えて希望の萩驛に停車した、時に十時三十分。

驛前には態々小高先生が、お忙しい時間を割愛されて二人のお子樣と石山さん等と莞爾としてお出迎へ下さつてゐた。勧めらるゝがまゝに車を新にして市の東部に位する前小畑の先生自宅に直行した。

清められた客室の正面に　恩師日生上人の謹寫大本尊と其左右には、日蓮聖人と、日生上人の御肖像それの上部に恩師の賛文ある三幅が恭しく奉安されて居る、この尊前に合掌した時、心身共に壯快云ふばかりなく嬉しかつた。小高先生は落付く間もなく患者の宅から電話があつて、數軒の往診を致されねばならなかつたのである。察するに今は一年中でも比較的患者の尠ない暑者の閑散期であるべきにも不拘、法華經精神で患者に對應される先生の態度が、四方から引張りだこになるのであらう。『汝等の行する所是れ菩薩の道なり』を色讀されつゝあるかと思ふ、そこには又日蓮主義の先生のニックネームある所以であらう。先生の往診中に附近の松蔭神社から松下村塾、伊藤公舊宅や、東光寺等を一巡し、笠山の休火山跡の奇觀等を、石山氏に依つて案内せられ、獲る所頗る多かつた。

晩七時、會場とされて居る朝日舎に迎へられた。同志は續々として來會され定刻妙蓮寺の富元師を導師として初めに勤行、終つて小高先生の御紹介で、予は『今は是時なり』と思想界の現狀から、日蓮聖人の主義主張の二大方面を擧げ、宗教的濟度より更に理想文化建設の實現にお互協力一致精進されんことを望むと述べ、九時半頃から座談に移る。

『我等は個人的に又社會的に如何に精進すべきかを具體的に話されたし』とか『善とは何ぞ、惡との區別』や『佛の本體と其精神』或は『私共は靈魂の有ることをどうして味識するか』乃至『信とは何ぞや』等々極めて重要な諸問題が、若い男女の間に眞劍に論議され、末永家の好意ある茶菓の饗應に手も觸れるさへ惜しい迄に一同は熱中し、『モー午前一時です』の聲に漸くこの有意義の會合の幕は閉ぢられ、靜け

き市中を三々五々袂を別ち、予は又復小高家の御厄介となつた。

華々しい大講演會も時としては必要であるが、かうした同志の隔意なき研鑽にお互の思索を練ることは一段と肝要なことゝ思ふ。

同十八日朝八時半、小高先生に送られて東萩驛から乘車し、數分後に萩市驛で富元師始め末永さんや妙蓮寺總代等の方々に見送られて、來た路を再び三田尻に急いだ。約四時間の後到着、午後一時過東上の列車に乘換へて尾の道に向ひ、晩七時十八分着、直ちに西國寺に展墓夫より堀田家に一泊させて頂いた

同十九日午前四時四十三分尾の道發で一路東海道靜岡に急行し、十二時間後には該地に於ける同志福岡さんにお目に懸ることが出來た。而してその肝入りで江尻の前島さんや、用宗の竹内さん等を御紹介下さつて同夜は十一時過迄も信仰座談に興を覺え一同法悦に浸つた。

同夜は用宗の福岡家別邸にお世話になり翌二十日朝八時、梅雨の降りしきる中をば竹内さんや、殊に福岡さん御兄弟は態々靜岡驛迄もお見送り下さつて彌々帝都に病妻を氣遣ひつゝ明日を約してお別れした。車中幸にすいて居たからこゝぞとばかり萬年筆を動かして晝時も忘れ何か書いた。

皆さんのおかげで漸く午後三時、六日目に歸館して、御寶前に奉告し感謝の題目を唱へながら晩の大森行の支度をすることが出來た。

終始一貫寔に有難い旅路であつた。爰に謹んで乍略儀各地に於ける同志諸賢の御芳情を厚く感謝致しつ筆を擱く。

——九、六、二一——

本部團報

六月中に於ける本部の主要事項としては上旬七日午後五時より會館の會議室に於て維持會を開催し、上田理事長始め幹部、恩師日生上人御嫡子、小林一郎先生等約二十名來會の上教化運動に關する懇談會に本團役員任期滿了に就て選擧され其の結果左の通り決定承諾された。

理事　上田辰卯氏、井上道太郎氏、伊東竹三郎氏、岩上浦三郎氏、山田英二氏
柴田武治氏、磯部滿事氏

監事　横山正三氏、岩井常氏

右の內理事岩上浦三郎氏は中村清兵衛氏と、監事岩井常氏は小澤元章氏と更迭され、他は重任である。六時半閉會され、七時より小林先生の法華經講話を聽聞した。

◇　◇　◇　◇

法華經講座は五種法師の行を說かれた達門流通分の法師品が終つて、四衆八部の類の疑を除かんが爲めに多寶佛が出現されて皆是眞實なりと證明さるゝ見寶塔品に達んで居り、來聽者も益々增加法悅に浴さるゝは自他の慶幸と感謝に堪へない。

◇　◇　◇　◇

毎週の日曜日勤行と法話は一層一段お組となつて、これは純宗教濟度を中心として、更に理想文化の建設に資すべく最善を竭して居る獻身的な集りである。教化運動とか、社會善導とか、國民向上の各種の施設はあるが、畢竟お互は最後成佛といふ一事を眞劍に考へねばなるまいと思ふ。

◇　◇　◇　◇

東鄕元師の追悼會を十二日午後二時池上本門寺で營みたいから、是非臨席燒香するやうにとの日蓮宗管長からの案內に、磯部理事は參列した。定刻神保管長大導師となり、影山總監並に新倉所長脇導師となつて東京寺院出仕、喪主東鄕彪氏、小笠原子爵、佐藤中將、仙石子爵等着席、來賓、一般參拜者數百名あつて型の如く虔修され、三時半嚴粛裡に終つた。

横濱教誌

五月四日　夜　神奈川高部氏方にて、小西師及磯部先生の御法話。

同　九日　夜　磯子町高橋氏方にて、和賀師及び磯部先生の御法話。

同十三日　午後三時より程ヶ谷峰岡町平岡氏方にて例會。小西師、東京小松川より御來話。

同十四日　夜　長久保氏方にて、磯部先生の御話。

同十六日　夜　神奈川榮町石毛氏方にて、「佛敎の應化」磯部先生。

同十八日　夜　神奈川三ツ澤岩上氏方にて小西師の御法話。

同二十二日　夜　磯子町大內氏方にて「慈悲の聖人」磯部先生。

同二十七日　夜　神奈川三ツ澤齊藤氏方にて小西師の御法話。

福島教信

五月十三日　夜　大町中村榮方で幹部會。今年度事業方針につき協議す。

同十九日　午後一時より福島高商日蓮聖人讃仰會例會を校內で開く。磯部先生東京より御來講。宗教の概念について通俗的な御話があり、次で福島商業の岩瀨先生より日本の國體について有益な御話があつた。會する者二

十餘名福島師範より栗原先生が數名の熱心な學生諸君と共に御聽きに來られて非常にうれしかつた。

同十九日 夜 大町中村樣方にて統一團福島支部例會、碓部先生より「信仰と感激精神」について有益な御話があり會する者三十餘名盛會であつた。

同二十一日 夜 中村樣方にて先輩福岡氏を中心として日蓮聖人鑽仰會座談會「宗教は何故に必要か」「日蓮聖人を何故鑽仰するか」について名論迭論續出し、夜の更るのも忘れ和氣藹々の中に深夜散會。

日下治作氏を悼む

五月二十六日病歿されたる日下氏は、日蓮主義青年團時代より入信され、其後統一團支部の一員として信仰、最も强盛に、又社會的には共濟委員、青年團長、納稅組合長等を兼務し、市民の爲めに盡瘁されしが、不圖丹毒症に罹り急逝されしは遺憾至極とする處なり。四月三十日市內本法寺に於て告別式を營み、福島縣知事、市長、青年團、納稅組合、商工業組合及び統一團本部並支部等々其他多數の弔辭弔電ありて故人の德望を偲ばしめたり。行年三十有四歲 虔みて其追福を祈る。

南無妙法蓮華經

新加盟者

久留米市鍛冶屋町　平岡越郎殿

札幌市外圓山村　林啓太郎殿

相州小田原町　中村銀藏殿

（碓部氏御紹介）

松陰

我今爲國死
死不背君親
悠々天地事
感賞在明神

寄附金維持及團費誌料領收

（自五月二十一日 至六月二十日）

一金參圓參拾錢也　久留米　平岡越郎殿
一金貳圓四拾錢也　福島　水上トイ殿
一金壹圓四拾四錢也　大阪　山の神傳道團殿
一金五拾圓也　東京　某氏殿
一金貳圓五拾錢也　同　高橋福一郎殿
一金貳圓五拾錢也　同　馬田平藏殿
一金壹圓貳拾錢也　神戸　延廣純靜殿
一金五圓也　札幌　林啓太郎殿
一金貳圓五拾錢也　小田原　中村銀藏殿
一金貳圓五拾錢也　大阪　林物治殿
一金五拾錢也　東京　日下部二葉殿
一金壹圓也　同　小峰豐子殿
一金五圓也　同　前田良吉殿
一金貳圓五拾錢也　東京　森山春吉殿
一金壹圓貳拾錢也　濱松　三谷邦治郎殿
一金貳圓貳拾錢也　名古屋　石田よしの殿
一金五圓也　東京　横山正三殿
一金貳圓也　同　宇野博順殿
一金貳圓也　同　沼部彌太郎殿
一金參圓也　同　和田德治殿
一金壹圓貳拾錢也　同　能勢賴武殿
一金壹圓貳拾錢也　同　目黑駒太郎殿
一金五圓也　甲州　原田幸八殿
一金貳圓貳拾錢也　紀伊　乾涼甫殿
一金五圓也　東京　山田英二殿
一金貳拾圓也　同　柴田武治殿
一金壹圓貳拾錢也　同　櫻井惣右衛門殿
一金壹圓也　東京府　唱行會殿
一金八圓四拾錢也　大阪　相馬布佐衛殿
一金貳圓貳拾錢也　同　友廣すみ殿
一金貳圓貳拾錢也　津山　福田つね殿
一金七拾貳錢也　大阪　山乃神傳道團殿
一金貳圓四拾錢也　名古屋　坂野千代子殿

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

念告

從來本部に於ては正團員も尊なる本誌購讀者も同一金額を以て御請授相仰ぎ居申候處漸々時代の趨勢に鑑み爰に本團は 先づ本誌の增大を圖ると共に正團員と誌友とを區別すべき必要相感り申候に付本誌卷頭略則御諒承の上爲法國爲一切衆生可相成團員として何卒御賛助あらんことを偏に奉懇願候

財團法人 統一團

清水龍山　守屋貫教　中谷良英
鈴木一成　榊原久遠　共編

新修略註 日蓮聖人遺文集

内容見本呈上

再版改訂

科段別註 御遺文百廿余編（脚註入）

御義口傳
御講聞書
妙行要文集
一日一訓
聖語字解

体裁 裝幀
巻頭挿入クリームアート寫眞版七葉
四六版　縦六寸二分　横三寸五分
紙數　千百十四頁
特製　總皮　三方金
並製　總クロース　天金
函入最上美本

定價　特製　三圓八十錢
並製　二圓八十錢
送料　廿一錢

發行所
東京市日本橋區江戸橋二ノ六（明正ビル）
久遠閣
電話日本橋㊀三一七番
振替口座東京七二八〇六番

新案 176867
特許 179231

クオン、カラー

詰襟用カラー（セルロイド芯入）

特長（衛生 経済 便利）　三拍子揃ひ　特價拾錢 送料貳錢

衛生　夏は汗を吸取り冬は肌ざはり爽やかにして皮膚をいためず常に襟元の美が保たれます。
經濟　本品は低廉にして永久型の崩れぬ製法にて從來のカラーと異なり洗濯屋へ出す費用と手數を省き御家庭で簡單に洗濯が出來ます。
便利　時代の要求により生れたクオンカラーは洗濯簡易ですから二三本あれば一年中間に合ひ。

クオンカラー製造發賣元　東京市四谷區内藤町一番地　山田商會
電話四谷五〇一五番　振替東京六二二番

◎洗濯の仕方、一時間位水又はぬるま湯に入れたカラーを板の上に置き、石鹸を付け、ブラシにてこすりシボラズ水ゆすぎして其まゝ乾して下さい　乾き次第直に御使用が出來ます。

警視廳各學校御用、三越、三省堂
一流洋品店にて發賣

只今がクリーニングの絶好期

移りかわりのお召物は
汚れたまゝお仕舞ひになると
お品をいためます

小峰洗染所
日本橋區小傳馬町三ノ五
電話浅花四一一八番

—日蓮主義—
—朝聞夕改—

御報參上

謹告

來る七月十五日第三日曜日
恩師日生上人御命日逮夜於本部午後七時三
十分より盂蘭盆會精靈祭並に講演會相營み
聊か先德、團員諸靈の報恩に擬し度候
市内及近郊の各位には後日更に御案内可申
上候へ共豫め御含み置被下度此段豫告仕候

七月一日

財團法人 統一團

求人

炊事婦 一名

年齢は幾歳でもよろしい、身體强健、清潔ずきの婦人を望む。

委細面談（毎日午前八時より九時までの間）
又ハ手紙（電話は謝絶）

小石川區音羽六丁目電停前
統一會館

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄改版 特價 送料共 金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領 仝 金貳圓拾錢
一法華經要義 賜天覽 仝 金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓 仝 金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要 仝 金貳圓九拾錢
一佛教の本質と其價値 仝 金貳拾五錢
一法華經要品 仝 金五拾錢

礒部滿事謹輯
一本多日生上人 特價 送料共 金壹圓七拾錢
一勤行作法 仝 金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人 統一團出版部
振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌
定價一冊 金拾錢
送料 金五厘
一ヶ年前金 金壹圓貳拾錢
送料共

申込所 東京市小石川區音羽町六ノ一七 「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢〜送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢〜

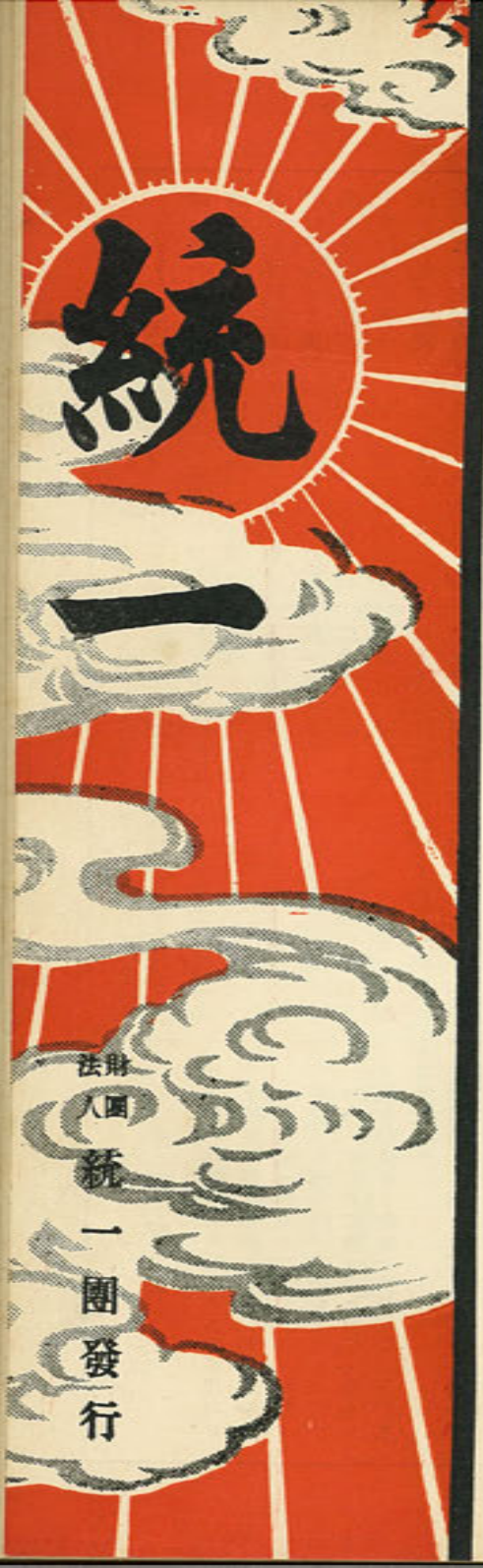
注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和九年六月廿四日印刷納本
昭和九年七月一日發行
（第四百七十二號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人 礒部滿事
印刷人 鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



目次

日蓮主義（前篇）……日生上人
日蓮教學講座（第十一回）……河合陟明
日本精神運動と聖日蓮（上）……和賀義見
東郷元帥（和歌）……大八木義雄
法華經講話（第八講）……小林一郎
記事と教報
○寄附團費誌料領收

第三十九年八月號